
遊戯王 trust of world

スマイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 trust of world

【Nコード】

N3005Y

【作者名】

スマイル

【あらすじ】

****5D'sの世界からGXの世界へのタイムトラベルものです。

主人公『不動カイト』が織り成す学園生活。デュエルアカデミアにて起きる闇との戦いを仲間達と共に立ち向かっていく。

タクティクス、知識共に中の下。当時の資料を読み漁りながら進めていきます。

単純に、シンクロ召喚を展開したいのが本音だったり。

第0話 第一次報告& a m p; 前振り

第0話 定時報告

ス「いやゝ、ついに手を付けましたよ、遊戯王に。かなり前からデュエルやってますけど、仲間内、兄弟内では全く勝ってませんけどね」

?? 「そんながよくこの小説描こうと思ったよな…正直不思議だぜ」

ス「おやおや、アナタはどちらサン？」

?? 「この小説の主人公、って言ったら笑う？」

ス「いえいえ、弱小たるワタクシの分身でございましょう？」

?? 「何を隠そう、って違うわヴォケェ!!」 ↑思いつきりアッパ―

ス「あばすっ!!?」

?? 「ホントに主人公だっつつてんだよ。この能無し!!」

ス「ぜ、全力、全開、ツスカ…（がくっ）」

?? 「ま、いっか。さてさて、いよいよ始まります、『遊戯王 trust of world』。初回はこんなですけど、次回から本編に入ります。できれば長い目で見ていただけたら幸いです。

どうぞ、よろしく願いします!!」

第1話 仲間との絆 運命の初戦（前書き）

とりあえず、第1話です。

キーカードは：『レッド・デーモンズ・ドラゴン』

カ「レベル8のシンクロモンスター…守備表示モンスターの効果破壊と、攻撃宣言しなかった自分のモンスターをエンドフェイズ時に全て破壊する効果を持った強力カード」

ス「ジャック・アトラスのエースモンスターだ。シンクロ素材に縛りがない分、容易に召喚できるし、レベル8モンスターの中でも妥協召喚で出す人はまずいないだろ」

第1話 仲間との絆 運命の初戦

とある昼下がり、

学生服を着た少年と、フリルがついた青いコートのおかつぱ頭が会場内で決闘デュエルをしている。

ここはデュエルアカデミア試験会場。既に俺の前一つまり、会場にいる少年までは試験が終わっている。ちなみにあの青コートは少年を「ドロップアウトボーイ」と呼び、蔑んでいる。ま、受験番号110番じゃそう言われるしかないか。会場では無骨な歯車だらけの機械人形が、翼の生えた超人を見下している。機械人形は『古代の機械巨人アンティライズ』。翼の生えた超人は『E・HERO フレイム・ウィングマン』だ。どちらの攻撃力が上かは言わずもがな。その時、会場内が摩天楼に変わる。

（摩天楼一スカイスクレイパー…か。終わったな）

『フレイム・ウィングマン』の効果も併せれば、もう終わったも同然だ。観客席から1Fの廊下に向かうと同時に歓声と試合終了のブザーが聞こえる。どっちが勝ったかは見ない。見たところである少年と戦う訳じゃない。

（さて、どのデッキで行くかな、と）

ベルトに通っているホルダには三つのデッキがそれぞれ入っている。どれも皆引退したプロのデュエリストから託されたデッキだ。とりあえず左側のデッキで試してみるか。

デッキと共に決闘盤デュエル・ディスクを取り出す。皆が使っている一般生産タイプ

とは全く違い、モンスターカードゾーンは分割せず一列に並んでおり、ディスクが丁度手の甲の辺りに装着するタイプ。こいつの名は「ホイール・オブ・フォーチュン」。デッキと共にこれを渡してくれた人からは「必ず勝ち続けろ!!」と脅迫(?)してきたけど、デュエルには勝ちもあれば負けもある。今は命がかかっているわけではないので、試用ってことでこの人を使うことにした。ある程度調整が終わったところで、先程の少年がこちらに走ってくる。

「アンタか、俺の次にデュエルすんのは」

「ああ」

息を切らしているのは急いでいるからじゃない。早く見たくて急かすために来たようだ。

「さっきの人が待ってるぜ。早く言ったほうがいいんじゃない?」

俺の対戦相手はあの人か……あんまり気が進まないな、あの人相といい……

「解ったよ、そう急かすな」

「頑張れよ? あの人結構強いぜ」

「それも知ってる。あと、お前。名前は?」

「俺は十代、遊城十代だ。アンタは?」

「カイト：『不動 カイト』」

そう名乗ると、十代の横をすり抜けるように立ち去る。とっとと行きましょ。待たせたとあっちゃ、決闘者^{デュエリスト}としては失格だ。

「来たようなノゝネ。ワタシが試験担当官のクロノス・デ・メデイチなノゝネ」

「受験番号9番、不動カイトです。よろしくお願いします」

ちゃんとしたお辞儀の後に目にしたのは、目を丸くしているクロノス試験官。

「何か？」

「い、いえ、礼儀正しくてよろしいノゝネ。ちなみに遅刻した理由は何ノゝネ？」

「ちよつとばかり渋滞に巻き込まれて…」

「そうなのゝネ。それより早くデュエルを始めるノゝネ」

試験官がディスクを起動させるのに合わせて、俺もディスクを起動させる。何だか似てるな、あの人のディスク……

「^{デュエル}決闘!!!」

クロノス LP 4000

カイト LP 4000

「先攻は私なノ〜ネ、ドローニヨ……私は『^{アンティータイガー}古代の機械騎士

喚するーノ。そしてカードを二枚伏せてターンエンド」

クロノス 古代の機械騎士 ATK||1800 DEF||500
伏せカード 二枚

ふうん……セオリー通りか。あの二枚のどちらかは『奈落の落とし穴』、もしくは保険として『聖なるバリアーミラーフォース』かな。じゃあ、こっちはこっちのセオリーで、

「俺の^{マジック}ターン、ドロー。手札より^{マジック}魔法カード『ハリケーン』を発動。^{マジック}魔法・罠カードゾーンに置かれているカードを全て手札に戻す」

「なっ、何でスト〜ッ!!!!」

竜巻によって伏せられていたカードが全てクロノス試験官の手札に加わる。

「更に、相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない時、手札よりレベル5の『バイス・ドラゴン』を特殊召喚できる。来い！！『バイス・ドラゴン』！！」

紫色の無骨なドラゴンが咆哮と共に光の中から現れる。緑の翼を羽ばたかせ地に降り立つと、機械仕掛けの騎士に威嚇する。

バイス・ドラゴン ATK≡2000 DEF≡2400 ↓
ATK≡1000 DEF≡1200

「レ、レベル5のモンスターを特殊召喚…って、ステータスが下がってます〜ノ？」

「これがこいつのデメリットだ。この方法で特殊召喚されたこのモンスターの攻撃力・守備力は半分になる。まだだ、俺は手札から『ダーク・リゾネーター』を通常召喚！」

音叉を持った小柄な悪魔。それだけしか説明できない。ただ、シユールだ。

ダーク・リゾネーター ATK≡1300 DEF≡300

「レベル5の『バイス・ドラゴン』に、レベル3の『ダーク・リゾネーター』を…チューニング！！」

「チュ、チューニングでス〜ト！！？一体何を…」

狼狽するクロノス試験官を差し置いて、デュエルは続く。アンタの言葉……今使わせてもらうぜ。

「『王者の鼓動、今此処に列を成す。天地鳴動の力を見るがいい。』シンクロ召喚！！」

『ダーク・リゾネーター』音叉を弾いた瞬間、三つの機械的な輪になり、『バイス・ドラゴン』を包む。その中から五つの光が列を成し、一筋の光となったとき……赤銅と赤を纏った異形の竜が俺の後ろに降り立つ。焰を纏って…

「我が魂…『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

「こ、攻撃力…3000でスート！！？『青眼の白竜ブルーアイズホワイトドラゴンと同じステータスなノ〜ネ！！！」

ま、確かにこっち（・・・）じゃ驚くことだろうけど、攻撃力3000なんてばら撒かれてるようなモンだし、気にしない気にしない。

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』 ATK 3000 DEF 2000

「す、すっげ〜…」

「何か、怖い…」

「カッコイイ〜、あんな召喚初めて見た！！」

十人十色とは言うけど、ホント、凄い反応。けど、客寄せパンダじゃねえんだ。一気に行くぜ。

「バトル!!」『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『古代の機械騎士^{ナイト}に攻撃!』『アブソリュート・パワーフォース』!!!!」

『レッド・デーモンズ』の手の平から放たれた焰によって、機械仕掛けの騎士は溶解し、爆発それに巻き込まれるようにクロノス試験官のLPも減っていく。

「あ、アンビリバボー!!!」

クロノス LP 4000 ↓ 2800

「な、何て攻撃なノ〜ネ……も、もう私の場がガラ空きなノ〜ネ」

「俺はカードを三枚伏せ、ターンエンド」

「くくっ……私のターン、ドローニヨ」

あの人のあの台詞にあの間延びしたような喋り方……何とかなんねえかな? 妙にカチンとくる。とはいえ、俺の手札はゼロ。手首についているカードホルダーには手札が一枚も無い。ま、次の手も読めなくは無いかど……何が出るかな?

「私は手札から『古代の歯車^{アンティーク・ギア}』を準備表示で召喚。そして手札から魔法カード『機械複製術^{マジック}』を発動する〜ノ。表側表示で存在する攻撃力500以下の機械族モンスター一体を選択して発動。選択したモンスターと同名モンスターを2体までを自分のデッキから特殊召喚する〜ノ」

古代の歯車^{アンティーク・ギア}*3 ATK=100 DEF=800

齒車に車輪が付いた人形が守備表示で三体现れる。しょうがない……次のターンで一掃するか。なんて考えてると、クロノス試験官が何かほくそ笑んでいる。気持ち悪っ!!

「カードを二枚伏せ、ターンエンドですゝノ」

(フフツ……これでシニョールカイトは二ターンの間はこれを破壊しなければダメージを与えられないでしょう。ですゝが、私にはまだ伏せカードがあるのでですゝノ)

「俺のターン、ドロー」

来たのは『ロスト・スター・ディセント』か。一応の保険としては充分だな……けど、あの伏せカードは恐らく攻撃反応型か。『ハリケーン』で手札には戻したけど……さっきの推察どおり十中八九『それら』だろう。

「カードを一枚伏せ、バトル。『レッド・デーモンズ・ドラゴン』アンティーク・ギアで『古代の齒車』を攻撃!!」

あつちは読みどおりとばかりに、何もしてこない。恐らく終盤あたりに意表について発動するだろう。だったら……

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の効果発動!!」

「な、何ですゝノ!!?!? あひゃあああっ!!!!」

攻撃は齒車に当たった瞬間、誘爆するようにして残りの二体も破壊される。その爆発が収まる頃には、クロノス試験官のモンスター

カードゾーンはガラ空き。

「い…一体、何が起きたんですノ!?」

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の効果……このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃したとき、ダメージ計算後、相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する」

「……………」

口をアングリと開けたまま驚いている試験官を尻目に、伏せカードを発動させる。

「更に伏せ（リバーズ）カードオープン。速攻魔法『サイクロン』発動。中央のカードを破壊する」

カード一枚分の小さな竜巻が伏せカードを弾き飛ばす。破壊したカードは…『聖なるバリアーミラーフォース』。運が良いんだか悪いんだか…。

「俺はこのままターンエンド……アナタのターンですよ？」

「わ、私の…ターン、ドロー…ッ!？」

その表情で俺は知ってしまった。多分あの人の手札にはモンスターがない。その表情から推測すると、あの伏せカードは……特殊召喚型の罠^{トラップ}じゃない。

「タ、ターンエンド、なノ…ネ………」

もう逆転の一手も残っていないような、肩を落としたクロノス試験官にはちよつと申し訳ないけど、サレンダー降参しない以上は決闘はデュエル続行。つまりは、俺がクロノス試験官のLPを0にしない限り終わらない。

「俺のターン、ドロ―…そのままバトル!! なんですけど…クロノス試験官」

「な、何なのゝネ？」

「ブルーアイズみたいな終わらせ方だったら納得します？」

「そ、それはどういう」答えは聞きませんけどね」お、鬼なノゝネ!…!!」

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』でダイレクト・アタック直接攻撃!!」『灼熱のクリムゾン・ヘルフレア』!…!!」

手の平に集まるはずだった焰が、『レッド・デーモンズ』の口に渦を作る。練り上げるように溜められた焰を一気に吐き出したところでデュエル終了のブザーが鳴る。

クロノス LP 2800 ↓ 0

「お、おい…嘘だろ…あいつのLP減ってねえし」

「つ、強い。あのクロノス先生を無傷で倒しやがった…」

「か、カッコイイ……」

ありがとうございます、と礼をして、そのまま会場を後にしようとした俺は観客席の見てしまった。闘争心剥き出しの男子達と、目をハートマークにして黄色い声援を送る女子達の二極だった。こ、怖い……これがホントの『天国と地獄』ってか……てか、この状況じゃ両方とも地獄だわ!!

廊下を戻る最中、十代とは会わなかった。慌てて来ておいて慌てて帰る。ちょっとした台風だな……ポケットからロケットを取り出すと、その中に詰め込まれている写真を見つめる。

「やっと第一歩だ。絶対に約束、護るからな……義父^{とう}さん……」

そこには優しい表情で写っている自分と義理の父……『不動遊星』だった。

第1話 仲間との絆 運命の初戦（後書き）

やっと一話投稿です。

デュエルの描写って難しいです。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第2話 出遭いと入学 明日への誓い（前書き）

さてさて、第2話でございます。

デュエルはありませんが、キーカードをば。

キーカードは…『スター・ライト・ロード』

ス「自分フィールド上のカードが破壊される効果が発動した時、その効果が無効にして破壊し、エクストラデッキから『スターダスト・ドラゴン』を特殊召喚する誘発即時効果の罠^{トラップ}カード」

カ「『スターダスト・ドラゴン』の特殊召喚は任意だけど、二枚以上破壊される効果のみが対象で、正規の召喚方法じゃないから『スターダスト・ドラゴン』の効果では蘇生できない。デメリットはそれぐらいか。終盤じゃ殴り倒されるし」

第2話 出遣いと入学 明日への誓い

アカデミア島へ向かうフェリーの中。

見事合格した俺は、ボストンバッグを枕にして寝転んでいる。あの後がまあ大変だ。怒涛と言っても良い。

試験後、お世話になっている海馬コーポレーションで一週間程、デッキのテスターとして寝泊りしていた。休憩は朝と夜だけ。食事休憩は昼食のみという何ともスパルタな一週間だった。

『こちら側』に来たときに社長と会って経緯を話したところ、オカルト話と一蹴され追い返されそうになったとき、丁度カードケースの中にあつた『伝説の白石』を見せたところ、異常なまでに喰い付いてきて、テスターとして雇ってくれることになったのだ。それからは前述の通り、怒涛としかいえないほどの仕事を押し付けられた。何でも以前まで雇っていたテスターがそのあまりの仕事の量に根を上げ、逃げ出してしまったという。何とも教科書どおりの進み具合だ。こういうの何て言うんだっけ……ああ、『テンプレ』か。ソレは兎も角。持ってきたディスクも調整してくれたりと至れり尽くせりだが、フェリーに乗る数時間前まで報告書の山と格闘した。しかも徹夜で。義父^{とう}さんと一緒にD・ホイールを組み上げたときも徹夜だったけど、二晩連続は流石に身体に堪える。

てことで、今は朝寝中。っていつてもまだ起きてるし、陸を離れてまだ数分。しかもこの人の量では寝るに寝れない。足を組んで頭の後ろで手を枕代わりにしているが、それでもこの揺れようはちょっと寝れるモンじゃない……人でごった返している中、ある一人の男が俺の頭の上にやってきた。黄色い上着と白いズボン、ガタイが

良さそうな顔付きだけど、ちょっと理知的にも見える。たしかコイツは受験番号1番：筆記試験が首席だったな。

「やあ、ちょっと良いか？」

「嫌だ。俺はこれから寝るんだ……とはいえ、これじゃあ寝れない、か」

体を起こすと、やっぱり五月蠅い：そんなにデュエルしたいなら外に出ろよ。風強いし、お前等全員飛ばされて来い。寝れないストレスに苛まれている俺に、男は同情するように肩に手をやる。

「原因は俺じゃないが、悪いな。多分、浮き足立ってるんだろ？」

「それ、使い方おかしいぞ。『浮き足立つ』っていうのは不安で落ち着かない様子のことだ。日本語を勉強する為に俺に話しかけたのか？」

「とんでもない。試験の時にお前が見せた『あの』召喚方法について聞いたかったのさ」

ほら来た。そういうのはもうちょっと後にして：くれないか。俺の周りでベラベラ喋り倒してるコイツ等に比べれば、こっちが尚の事落ち着く。

場所を変えようと立ち上がると、その男『三沢大地』もついてくる。ほとんど人気のいない、というか何人か女子がいるけど気にしない。手摺に寄りかかると溜息混じりに話を切り出す。

「さて、『シンクロ召喚』について知りたいんだったか？」

「『シンクロ召喚』：そういう名前なのか？　どういう理屈だ？」

「単純だよ。それぞれ素材となるモンスターの『レベル』を合計したレベルのモンスターを特殊召喚するのさ。俺が試験の時に出したモンスターの『レベル』は8。素材になったモンスターはそれぞれレベルが3と5、それで召喚できる。ただし、素材となるモンスターの中に必ず『チューナー』と付くモンスター1体が必要だ。更にこの召喚方法は特殊召喚扱いだから、その気になれば場に5体並べられる」

「つまりはレベルの足し算、か。原理は単純だな」

「まあな、いくつか例外はあるが……俺はあまり使いたくない。タクティクススピードと場の読みが必要不可欠になる」

「それは見せてはくれないのか？」

「客寄せパンダじゃねえんだ、そんなに大盤振舞いする気は更々無い。これに関して付け加えるのなら、『シンクロ召喚』するモンスター……『シンクロモンスター』は融合デッキに入れられる。これでいいか？」

「ああ……参考にさせてもらおうよ」

何の参考にするんだか……考えられるのは『メタデッキ』か。けど、『あれ』は……ちょっと。でも特殊召喚を止める、もしくはデメリットに変える構成にすれば、あるいは……。うーん、敵に塩を送りすぎたか……俺は馬鹿だ。

「ねえ…もしかして、あの人じゃない？」

「そうだよ。きっと」

「結構奇抜な格好だけど、良い人そう…顔も悪くないし」

「あたしはまあまあだと思うけど…」

その後、三沢と他愛ない話をしていると耳に入ってくるのは……ヒソヒソ話や陰口だ。大声で言いたい、ハッキリ言って『耳障り』だ。こっちの話がまともに出来ない。ていうか俺の格好、おかしいか？おかしいよな。

黒のYシャツに赤のズボン。更に赤いチョッキなら誰だって目を引く。まあ、黒いコートのお陰で目立たないだろうけど……。

「そういえば三沢、遊城十代って知ってるか？」

「ああ…クロノス先生を倒した奴だろ？ある程度っていうか、君とは負けず劣らず噂になってるよ。融合デッキを使いこなすデュエリストだってさ」

そんなんで比べられると、正直怒りのやり場に困る。コイツ、解ってて言ってるようだ。見掛けによらず頭の回転は早い。

「融合……『E・HERO』だったか？たしかに召喚速度や手札回りは充分に速いけど……シナジー出来るカードが多すぎて使い辛いな。一度だけ使ったことがあるけど、事故率が高過ぎる」

「ピーキー、と言った方が無難だな。正直、俺でも使いこなせそうに無い」

まさかこんな所で同じ意見と出会うとは……。

あのデッキの弱点は『偏り』や『縛り』ではなく、自分とデッキの『対応速度』の違いにある。欲しいときに来ない。必要な場面じゃないのに手札に来る、といった『擦れ違い』のような事が頻繁に起こる。まさかデュエル開始時の一番上のカードが『ホープ・オブ・フィフス』だった時は正直ゲンナリした。墓地には何も無いですよく、てな顔になったし。

「ま、アイツらしいデッキなんだろうけどな……俺とは大違いだ」

「君は『シンクロ召喚』主体のデッキだろ？」

「そうなんだけどな…俺は自分で『組んだ』んじゃないで、『借り』てるんだ。ほとんど」

「え？ そうなのか？」

俺が持つてるデッキは全部で五つ。その内の一つはかけがえのない大切なデッキだ。これを主に使って行こうとは思うけど…『こつち』じゃステータスが必要、低レベルは要らない、なんていう事だから俺の精神がもつかどうか……

「でも、借りてるからと言って疎かには出来ない。コイツ等は…特にこのデッキは、俺にとって大切な人から託されたデッキなんだ」
手の中にあるデッキの一番上には『スターダスト・ドラゴン』。こ

れは俺の義理の父親『不動遊星』から託された絆と想いが込められている。そんなの、無下に扱うわけにはいかないだろ…。

「余程大切なんだな……そのデッキが。お、見えてきたぞ」

三沢の視線の先には島が見える。山の頂上辺りには三つの塔に黄色いドームが見える。あれが『デュエル・アカデミア』か……長い三年間になりそうだ。

その後、長くて有難い校長先生のお言葉を拝聴してから各寮に分かれて移動する。事前に渡された制服の色は青。つまり『オベリスク・ブルー』だ。あのエリート気取り、嫌いだし……あまり関わらない方が良くかも。それに俺、青嫌いだし。わざと降格しようかな……『オシリス・レッド』の方が居心地良さそうだ。あの古びた感じが何とも……なんて考えてる間に寮の部屋に入るけど……ここ、ホテルか何かか？ えらい広いし、ベッドもデカイ。終いには寮の食事。朝昼晩とフルコースだというから何だか腹が立つ。ていうか既に立腹状態です。適当にバッグを放ると、着替えもせずソファに寝転ぶ。フェリーで寝れなかった分、こっちで安眠させてもらおうとす……る……（怒）。

何かゴチャゴチャウルセえな。何だよ、ったく。考えてみれば、ここ二階だし：デュエルフィールドが丸見え。しかも言い争ってる中に、あの遊城十代までいる。一緒にいるのは確か……在籍中の帝王^{ザイ}の弟、だったか。相手は勿論『オベリスク・ブルー』の生徒。あ、ゴメン。もう限界。

窓を全開にすると、ベランダに出て身を乗り出す。

「貴様、まんじょ「ウルセー！！！！！！」静かにしろ！！寝れねえだろうが！！！！」……ッ！！」

まるでテレビを点けたら大音量だったみたいな表情で全員がこちらを見ている。その輪の外には金髪の女子までいるし、彼女は耳を塞いでいる。フェリーの乗員にまで聞こえたんじゃないか？今の。

「テメエら、揃いも揃って仲良く出来ねえようだな……次に俺の安眠妨害してみろ？完膚なきまでに叩き潰してやる」

まるでジャックが乗り移ったかのように俺の周りが赤く染まる。お、コレが『荒ぶる魂』って奴か。今なら使いこなせそうだ。ベランダから飛び降りて赤と青を交互に見る。別に複数でも良いんだけどな……。

「貴様、『オシリス・レッド』の奴等の肩を持つのか？そんな小さい奴がこの『オベリスク・ブルー』にいるのは、ここの品格を下げるのと同じだ。今度からは「何フカシこいてんだ？俺はテメエ等だけに言っただんじえねえんだよ。幼稚園からやり直して来いよ。青^サ二才」

「え……俺も？」

「当たり前ッスよ、アニキ。これは元はと言えば僕達が勝手に…」

「そのメガネ、理解したか？次は無えぞ……誰だろうと『手加減しない』」

それはつまり、1ターンキルされても文句言うな、って事だ。まあ、実際やったことないし、やる気もない。でも脅しには充分でしょ？

「万条目さん、コイツですよ。ノーダメージでクロノス先生を倒したの」

「そうだ、コイツだ。見たこと無い召喚方法を使ってた…」

あのツンツン頭……アイツがこの愚図共のアタマか……威厳だけは一人前だけど…

「ほう…確か『不動 カイト』だったか？」

「テメエのようなサルに、名乗った憶えは無いけどな」

「サ……こ、この俺を侮辱するとは、貴様…っ!!」

「どのお前だか俺には見当が付かない……喧嘩はゴメンだが、デユエルなら何時でも受けてやる…『王者』^{キング}の弟子である俺が…」

「キ…キングだと？一体だ「お前は知らなくて良い。二度と俺のやることに口出し、手出しはするな」…っ!」

二度目の台詞被せが終わったところで俺は部屋に戻る。全員言葉を

失っているようだが、やりたいことを邪魔されれば誰だって怒る。でも、今の俺はかなりマズい事をした。あの場にいる全員に『宣戦布告』をしてしまったのだ。いつも一言足りないんだよなあ。

部屋に入り、ドアを閉めるとほぼ同時にノックが聞こえる。また安眠の邪魔をするか……今度は丁重にしないとな。いつまでもコレじや埒が明かない。

「はいはい…次はどちらさ…ま、ってアンタ…」

「こ、こんにちは…」

ドアを開けた先にはさっきの輪の外にいた女子。名前はまだ知らないが、何だが申し訳なさそうにしている。おれ、何かしたかな…？あ、ヤバイ。

「その…さっきの事だけ………」

「いや、アンタは、その……何っーか、巻き込まれた？って感じだから、気にしなくて良いぞ」

「そ、そう…良かった…」

「俺はああいうのはハナから大嫌いだけど、初対面なら誰だって仲良くしたいだろ？」

「ええ……そうね」

な…何だ、この会話。まるでカップルが喧嘩した後の空気だろうか…
な、何とかせねば……………」

「「あ、あの……………」ど、どうぞ？」

駄目だ…完璧におかしい…………どうしてもこの空気から脱出できない。

「出来ればなんだが…ハイ」

差し出した手に疑問を感じているが、取り敢えず友好の印ってことで。

「俺はカイト、『不動 カイト』だ。よろしく」

「明日香よ、『天上院 明日香』。よろしくね、不動君」

握手。

それだけで本当に友達になれそうだ。かといって小さい輪にまとも
ったまま過ごしたくないな…後で十代達にも謝っておくか。衝動的
とはいえ宣戦布告しちゃったし。

「取り敢えずこれぐらいにして、俺…寝るわ」

「ま、待って」

「?…どうした?天上院」

「明日香で良いわ。その、万条目君の事だけど…あまり関わらない
方が良い、って言いたくて…」

何かしらしい……さっきまでは凛々しく見えたのに……

「ま、相手になるなら容赦しないし……適当に放っておくさ。ただ……」

「ただ？」

「俺にとって『許せない』事をしたら、その時は……本当に『叩き潰す』けどな」

誰に向けたわけでもない威圧は、明日香にとっては恐怖の対象だろう。目の前でそんなされても困るし、怖い。

「てことで、今度こそ寝るわ。二晩徹夜はキツイし……」

「え、ええ。ごめんなさい……勝手に」

「良いんだよ。もう友達、だろ？早いけど、おやすみ」

「……おやすみなさい……」

そう言ってドアを閉めると、ソファに寝転ぶ。何かどつと疲れた。色々ありすぎだろ……此処に来てから。今度からはあのイメージを常に出せるようにしなきゃな。『アレ』を使いこなす訓練には丁度良い。

そこで一瞬にして思考が切れた。それこそ本当に糸が切れた人形のように……。

数時間後。

部屋の前にシルバーのワゴンが止まってる。見てみると、味付けしてただ焼いただけの肉や野菜が並んでいる。それにラップしてある皿の脇にはメモが。何々……

睡眠ばかりじゃなくて、食べなきゃ駄目よ？

天上院

あんたは、俺の母親かつつの。

第2話 出遭いと入学 明日への誓い（後書き）

長々と申し訳ありません。

デュエルに関しては構想中ですので、しばしお待ちを。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第3話 デュエルでも 必要なもの（前書き）

第3話でございます。

本日のキーカードは……『紅蓮魔竜の壺』

ス「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がフィールドにいる時に発動できて、デッキからカードを二枚ドロウ出来る」

カ「サポートカードの意味合いが強いし発動条件に縛りがあるけど、蘇生制限も無く、尚且つハンド・アドバンテージを取れる可能性がある一枚だ」

ス「実際に使ったら『死者蘇生』と『手札抹殺』引けましたよ？」

カ「マジか!!?」

第3話 デュエルでも 必要なもの

明日香が食事を届けて数分後。

皿を空にした俺は、食堂まで持っていこうとした時にそれはやってきた。

明日香だ。

いつも思うけど、皆して暇なのな。俺にばかり構ってないで自分のこと何とかしようぜ…なんていうのを晴らすようにしてきたのは明日香の言葉だ。

『外でデュエルが行われる』と。

しかも相手はあの万条目とかいう取り巻きの大将様。ホント、皆暇だねえ…。

仕方ない。安眠妨害の代償を払わせるか…早足で皿を返した俺はそのままデュエルフィールドへ向かった。

ブルー寮・デュエルフィールド

暗がりであまり見えないが、青い制服の何人かと十代、メガネの小僧が向かい合っている。そこに飛び込むようにして明日香が注意するが聞いてはもらえない。ここは制裁……じゃなかった、助け舟でも出すか。

「だったら俺が誰かを相手してやるよ……さあ、誰が相手だ？」

すでにセットしてるディスクを胸の高さまで持ち上げると、向こうは誰が出るかを話し合い始める。そして、一分もしないうちに、

「僕が行きましょう…なに、すぐに化けの皮を剥がしてやりますから」

カチン

「よく言った……」

「ちよつと!!それじゃあアナタが来た意味が……」

「悪いがそれは聞けない。手痛い竹箆返しがどれほどか、教える為のモンだ…邪魔しないでくれ」

男の子にだって意地があるんですよ、どんな時でもね。てか、いつまで余裕かましてんの？人の安眠妨害しておいてよくもまあ、そんな顔が出来るものだ。考え出したらどんどん怒りが熱を持ち始める。なのに頭がクリアなままだ。

「ほお、アナタも随分と余裕ですが、すぐにそんな顔を消してあげますよ」

「おい…」

「何ですか…？」

「そんな安い挑発に乗ると思ったか？今の俺は機嫌が頗る悪い……このままじゃ気が晴れねえ。気晴らしだ……とっとと派手な決闘^{ライフ}を始めるか」

「いいでしょう……」決闘^{デュエル}！！」

取り巻き LP＝4000

カイト LP＝4000

ソリッドビジョンが起動すると、虹色に輝きだす。LPが4000に固定されると、向こうのデッキからカードが五枚せり出す。俺のディスクは一呼吸置いてから自動的にシャッフルされた後、自分でカードを五枚引き抜く。

今の手札は、

・パワー・ジャイアント

・二重召喚

・紅蓮魔竜の壺

・ダーク・リゾネーター

・グローアップ・バルブ

……これ、やって良いよな？てか、出来るぞ。

「何を固まっているのですか？私のターン、ドロ……私はカードを一枚伏せて、ターンエンド」

取り巻きの後ろからは「もう来たのか……」やら「アレが見れるのか」やら聞こえるが、正直に言おう。

無駄だ。

「俺のターン、ドロ」

来たのは……『クリエイト・リゾネーター』。うん、これ決定。手札に加えると大きく深呼吸する。

「どうしました？まさか手札事故ですか？」

その言葉に大きな笑い声が聞こえてくる。よし、殺ろう。

「んな訳ねえだろ……手札のモンスターを墓地に送り、『パワー・ジャイアント』を攻撃表示で特殊召喚！」

墓地に『グローアップ・バルブ』を送って、出てきたのはビビットカラーのクリスタルで出来た巨人。

パワー・ジャイアント ATK≡2200 DEF≡0

「な……攻撃力2200のモンスターを特殊召喚だど……！」

「このカードは、手札のレベル4以下のモンスターを墓地に送ることと特殊召喚できる。そして、墓地に送ったモンスターのレベル分だけ、このカードのレベルは下がる」

「すっげー……いきなりレベル5のモンスターが出てきた」

「しかも攻撃力は2200……」

「レベル以外のステータスは変わらないまま特殊召喚できて、尚且つ序盤では攻撃力でボード・アドバンテージを取れる。召喚権を行使しなくても充分に制圧力があるわ」

「明日香……半分正解で半分不正解」

「え……？」

「まだ行くぞ。手札から『ダーク・リゾネーター』を通常召喚。そして、レベル5となった『パワー・ジャイアント』にレベル3の『ダーク・リゾネーター』をチューニング」

音叉から波紋が広がり、それに重なるように悪魔が三つの輪に変化する。

「『王者の鼓動、今此処に列を成す。天地鳴動の力を見るが良い』……シンクロ召喚……！！」

五つの光が一筋の光に変わったとき、炎となり、紅蓮の竜が羽ばたき、咆哮を上げる。

「我が魂、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』……！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK＝3000 DEF＝2000

「な……たった1ターンで攻撃力3000のモンスターを…」

「頭痛薬飲んだか？鎮静剤打ったか？まだまだこれからだ……レベル8のシンクロモンスターが特殊召喚に成功した時、手札の『クリエイト・リゾネーター』を特殊召喚。手札から魔法カード『二重召喚^{サモン}』を発動。この効果によりこのターン、もう一度だけ通常召喚が出来る」

普通はここまでではなくて良いけど、一応保険って事で。

「更に、墓地に存在する『グローアップ・バルブ』の効果発動。デッキの一番上のカードを墓地に送ることで、このカードを特殊召喚できる。蘇れ、『グローアップ・バルブ』」

グローアップ・バルブ ATK100 DEF100

球根から覗く目が怪しく光るとフィールドに現れる。これで全て揃った。後は俺の技量次第だ。理由は不純だけど、怒って良いことだよな？てか、すでに俺の魂は暴れまわってます。

「もう誰にも……止められないぜ。荒ぶる魂…『バーニング・ソウル』！！」

それに呼応するかのように『レッド・デーモンズ』が赤く輝きだす。操られるかのように二体の『チューナー』も赤い光を纏う。

「レベル8の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』に、レベル1の『グローアップ・バルブ』とレベル3の『クリエイト・リゾネーター』を、『ダブルチューニング』！！」

シンクロ召喚の時の緑の輪ではなく、四つの焰の輪が『レッド・デ
ーモンズ』を包み込む。

「『王者と悪魔、今此処に交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫び
を上げよ』……！シンクロ召喚……！！」

光の中なら出てきたのは、紺色の焰の模様が付いた赤い竜。二対四
枚の翼が荒々しく羽ばたき、焰とともに産声を上げる。

「真紅の灼熱……『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』……！！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK 3500 DEF 2500

「そ、そんな……」

「レベル12のモンスター……しかも攻撃力が……」

「すっげーっ……！！俺もアイツとデュエルしたいぜ……！！」

「ソリッドビジョンなのに……熱い」

やっぱレベル12のモンスターを生で見るのは皆初めてか……俺も
最初に見た時は、ビックリしたよりも正直、怖かった。映像として
映し出されるこのモンスターが今まで見たどのカードよりも『重く』
、そして『熱かった』。

「『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』の第一の効果。このカー
ドの攻撃力は、墓地に存在するチューナーモンスター1体につき5

00ポイントアップする。俺の墓地にいるチューナーは3体……よって『スカーレット・ノヴァ』の攻撃力は1500ポイントアップ」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK≡3500 DEF≡
2500 ↓ATK≡5000 DEF≡2500

「ば、馬鹿な…攻撃力、5000…」

「行くぞ……覚悟は良いな？『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』
ダイレクト・アタック
で直接攻撃！！『バーニング・ソウル』！！！」

「かかったな…伏せ（リバーズ）カード、オープン。『聖なるバリアーミラーフォース』発動！お前のフィールド上の攻撃表示モンスターの全てを破壊す」「『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』第二の効果！このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない！」な、何だと！！？」

ミラーフォースからの光すら突き破り、相手に迫る。奴は他にカードを伏せなかったのが原因。さらにはLPすらも超えており、次のターンは実質周ってこない。

取り巻き LP≡4000 ↓ LP≡0

0と同時にブザーが鳴り、ソリッドビジョンも消えていく。消えていく『スカーレット・ノヴァ』に視線をやると、何だか笑ったように見えた。……まさかな、主じゃない俺にそんな訳ないか。

「おい……」

「っ！！」

「今のデュエル：酷すぎた。慢心が過ぎる上に、行動一つ一つに余裕があり過ぎる。どうせ他のカードは伏せるだけ『無駄』、『不要』だとか考えてたんだろう？」

肯定なのか、全く動かない。他の取り巻きや万条目ですらも押し黙ったままだ。

「義父^{とう}さんの言葉、そっくりそのままお前等に教えてやる……『この世に不要なものなどない。どんな場所にも、どんな人間にも、不要なものなどあるわけないんだ』」

その言葉には皆が驚いていた。哲学にも聞こえそうだが、それは学校でも社会でも、それは通用する。それだけは最初に教えておきたかったし、心に留めておいてほしかった。

「デュエルでも同じだ。どんなにレベルが低くても、どんなに攻撃力が低くても……力を合わせればどんな敵にでも立ち向かえる。だから、『不要』なものなんて、ここにもあるわけないんだ。絶対に……」

第3話 デュエルでも 必要なもの（後書き）

一応ここで第3話、終了です。

中途半端とは言わないで下さい。ちゃんと修正したり次に続くようにします。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第4話 静かな時間、突然の来訪者（前書き）

何かデュエルと対話シーンが交互になってる気が……

気にせずキーカードを、

今回は『マジシャンズ・ヴァルキリア』。

ス「自分フィールド上に存在する魔法使い族を攻撃対象に選択できない効果……永続効果にしては場持ちが悪いな」

カ「守備力が1800じゃ『アームズ・エイド』あたりまでしか止められないし……」

ス「確か数年前じゃ30000ぐらいの値段だったぞ？ちなみに絵違いの『真紅眼の黒竜』は十万ぐらいだったな」

カ「これがホントの『レアカード』、ってか？」

第4話 静かな時間、突然の来訪者

ブルー寮前・デュエルフィールド

あの憂さ晴らし（デュエル）が終わって間もない時間。未だフィールド内で対峙している取り巻きと俺。

どんなに威張っても、罵っても、『魂』が腐れば自分の全てが腐る。この言葉でどれだけ改心してくれるかなんて考えていない。ただ、デュエルって……楽しくするモンだろ？この歳でそんなグチグチと……おかたいねえ。

「俺の義父^{とっ}さんもその言葉と、仲間との『絆』でデュエルを続けた。その愚図共はお前の『仲間』か？『絆』か？それすらも履き違えてつるんでるんなら……そいつら全員と相手してやるよ……気に食わないなら……」

そういや、今何時だ？寮の前にある時計は夜の十時半を指している。そろそろか……。

「ま、いいや……こんな時間に青空教室やったって、誰も聞きやしねえからな。興が殺がれた……帰って寝る」

踵を返して部屋へ戻ろうとする俺の後を明日香が追ってくる。凛々しいお方が何で俺の『金魚のフン』になるかね。別に鬱陶しいとかそんなんじゃないけど……。

部屋に着くと、明日香が部屋に入って良いか聞いてきた。そんな疚しい気持ちなんてコレっぽっちもない上に、寝るまでの暇潰しには丁度良い。話し相手にでもなってもらうか。ベッドにディスクとデッキホルダーを放ると手近なソファに腰掛ける。足はテーブルの上に組んで。

「ソレ、行儀悪いわよ？」

「かといって、止められねえよ。こうしないと落ち着かない」

部屋なんだし別に。一番落ち着く座り方だし、三年間だけしか使わないんだ……そういう風に使っても文句無いだろ？飲み物は…買わなきゃ無いか。

「アナタ、本当に強いよね……あんな勝ち方、誰も真似出来ないわよ？」

「強かねえよ。ただ、俺もまだまだ格^{ガキ}下さ。俺より強いヤツなんてごまんと居るだろ？」

「でも……あの召喚方法は一体何？融合とも違うし、儀式でもない……」

「アレは『シンクロ召喚』。後は三沢あたりにでも聞いとけ…と
いうより、説明がメンドい」

「『シンクロ召喚』……………ね「言っておくけど、俺はそれをアン
タに教える気も、使わせる気も無い。却って面倒事が増えるだけだ」
……………面倒事って…」

そんな拒絶の言葉に明日香の表情が曇る。好奇心で使うなら怒るけ
ど、教わるだけで使うならもつと怒る。

こういうデッキは使って何ぼ。経験値がモノを言うデッキだ……
それと召喚するモンスターの『レベル予測』も大事だ。手札にチュ
ーナーだけの場合、予測の幅が広がってしまうし、チューナーが居
なければ次に何を引くかだけでは足りない。戦闘等で素材が無くな
ったらリクルートが大変だ。後は『召喚するモンスターの効果によ
る状況予測』。使えるシンクロモンスターは十五枚が限界。『こっ
ち』でもそれは変えないけど。相手の戦略を的確に先読みして、そ
の状況に合わせたモンスターを召喚する。もしくは相手の行動をス
トップさせ、こっちのペースに持ち込む。

「……………ま、気が変わったら教えてやるよ。それま
では頭の片隅に憶えておけ」

「わ、解ったわ…」

「そういう事だから、俺は寝る。もうちょっと寝ないとどうも頭
がスツキリしない」

「ええ。邪魔してごめんなさい」

なんだか釈然としない気持ちの明日香を半ば追い出す形で部屋に静

寂が戻る。明日からこれが毎日続くのかと思ったたら頭が痛くなってきた。誰か俺に『平穏』という言葉をくれ。かわりにデュエルしてやるから。

二日後の夜、どうも外が騒がしい……誰がデュエルしてんだ、と思ったら十代の叫びの後、明日香の叫び声が聞こえた。一体何事？

翌朝。

食堂に現れた明日香に昨日の夜の事を聞くと、どうやら覗き魔を捕まえたらしく、そのお咎めを賭けて十代とデュエルした、との事。そろそろ良い加減勉強してくれ。騒がしくて寝ることもままならない。静かに寝ないとスツキリしないんだよ、俺。

「いい加減、夜ぐらい静かにしろよ。寝れなくて困る」

「寝てばかりじゃなくて、ちゃんと復習したら？それでも授業についていけるアナタには必要ないかもしれないでしょうけど…」

さも当然のように言うな。一応知識だけは入ってるけど、応用力に關してはあまりにも勉強不足なんだ。復習はしてるものの、そこに關しては正直困りものだ。口をつけていた珈琲が空になると同時に明日香が話を切り出す。

「そういえば、アナタってあのデッキ以外にいくつ持ってるの？デッキホルダーが後三つぐらいあったわよね？」

「ああ、デッキは全部で四つ。全部借りモンだ」

「借りてるデッキで入学したの？誰から借りてるのよ？」

「親から一つに、師匠から一つ、知り合いから二つ……かな？どれもこれもシナジーするには難しいカードばかりだ」

特にクロウとアキさんから借りているデッキは種族と名称限定のデッキだ。混ぜこぜにしたら大変危険なデッキだらけを借りたと今更後悔。

「でも、『シンクロ召喚』には特化したデッキだ。リクルートやバーンダメージ対策……破壊耐性とか全体除去なんかも兼ねているし、逆にソレを逆手にして展開できる」

「それ聞いたら、私は勝てなそうね……相手にするのを避けるに

越したこと無いわ」

「賢明だな……俺は男女問わず手加減しない」

話に夢中で珈琲が空だったのをようやく思い出した。話しすぎたのと併せて舌打ちすると、自分の分の食器を片付ける。

「ちょ……ちょっと待ってよ!？」

早々と食器を片付ける明日香を無視して、とっとアカデミアにも行くか。『平穩』なんて言葉が何か空しく感じてきた。

教室へ向かう途中でも明日香からの質問は絶えない。あまりのウザったさにとうとう俺も我慢の限界を迎えた。肩を掴んで壁に叩きつけると、思いつき睨んで威嚇する。

「テメエの好奇心を満たすために俺は居るんじゃないやねえ……そんなに知りたいんだったら辞書でも引いて睨めっこしてろ」

「生憎と、それとデュエルしか知らないの……後、女性には優しく接するって教わらなかった？」

「失礼。こちらも生憎とデュエルと喧嘩しかしてねえんだ。『親しき仲にも礼儀あり』って言葉、憶えとけ」

負けじと睨む明日香だが、どっかの厨二病患者みたいに萌える、なんて言葉は認識していない。ただ、こっちにも『予定』ってのがある。それを終わらせるまでは『こっち』に居なきゃいけないと考える。

ると何か気が抜けた。

ヤバイヤバイ。俺の脳内、リセットしろ。ここは学校だ、『サテライト』じゃねえんだ。

肩を離すと、おどけたように取り繕う。こんな時にポーカークフェイスが出来る自分に花丸をあげたい。

「なんてな。脅しは嫌いなんだ……悪かったな」

「いえ、私も出過ぎた事を「こぉ~~~~~のお~~~~~……」
……」

明日香が謝ろうとした時、何かがこちらに迫ってきているのが視界の隅に映った。何か……女子とは思えない形相でこっちに来てるんですけど……。

「クソ野郎おおおおおー……ッ!!!!!!」

うん。喰らった俺が言うのも何だけど……素晴らしいドロップキックをお持ちで。

綺麗に両足の裏が俺の顔面を捉えると、数メートル先まで吹っ飛ばされる。仰向けに倒れた俺は熱を持っている顔面に手を当てる。うん、鼻はドコだ？

「アンタッ！明日香さんに何してんのよ!!!!!!」

「ジュ、ジュンコ!?!」

「大丈夫ですか？明日香さん……アイツに何されました?」

まるで過保護な親のように心配するジュンコと呼ばれた女子は凄くオロオロしてる。てか、俺そんな野獣に見えるか？

「な、何もされていないけど……大丈夫かしら、彼……」

「良いんですよ、あんな獣放っておいて」

「それはこっちの台詞だ……まったく、投げ飛ばされるのは慣れるが、まさか吹っ飛ばされるとはな」

「何だ生きてたの？そのまま死んでれば良かったのに」

「随分と辛辣だな……白」
ホワイトカラー

ジュンコはそれを聞いた瞬間、スカートの裾を掴んで後ずさる。

「蹴っ飛ばすのはそっちの自由だが、スカートでやるのは感心しないな。それと、後ろの水色」
ブルーカラー

何故気付いたのか、と言わんばかりに気取られた女子が同じように後ずさる。何か、今日になって俺は玩具にされてる気が……ま、いっか。『あの人』の玩具よりかはまだマシだ。

「脅かすために背後に回ったんなら……デンプア消しとけよ。気付いてください、って言ってるようなモンだぜ？」

「お、おっしゃってる意味が解りませんわ？」

「……まったく、これがホントの『踏んだり蹴ったり』、ってか？冗談にしちゃ笑えねえ」

すっかり吞まれてしまった三人をおいて、とっとと教室に入る。てか、こんなんやってた場所が教室の目の前ってどうよ？

その日の夜、明日香に言われた通りに復習を終え、シャワーを浴びていると何か気配を感じる。おかしい…貴重品はそれぞれ部屋中にバラバラに置いてあるのに一つの場所から動こうとしない。部屋を間違えたって感じじゃないな…脅かすのも手だけどこれで女子だったら間違いなく退学モノだ。

一通りシャワーを浴び終わって、着るものを着てからタオルで頭を拭く。前方不注意だけど、拭きながら部屋に戻ると、

「遅かったですね…」

？……………何だ？声に妙な『違和感』を覚えてそちらを見ると、見知らぬ女性がベッドに腰掛けている。腰まで伸びた金髪に歳相応に凛々しい表情…コイツ、どこかで見た記憶が……………。

「あ……………ドチラサマ？」

「取り敢えず座って下さい。ちょっとお話が長いので…」

「ヘイヘイ」

ベッドのすぐ脇にあった椅子に腰掛けると棚の上に足を乗せる。

「で……話戻すけど、アンタ誰？」

努めて碎けた感じで話すと、向こうは言いたいことを整理しているのか、少し考え込んだ後に意を決して切り出した。

自らの使命と、自らの『通り名』を……

「私は『精霊世界』からアナタに仕えるためにコチラに来ました。
アナタ方側の名前で名乗るとするなら……『マジシャンズ・ヴァル
キリア』と申します」

……びっくり。

第4話 静かな時間、突然の来訪者（後書き）

第4話、如何だったでしょうか？

シンクロ召喚主体のデッキの概念は自己流なので、ご容赦下さい。

てか、主に『シンクロン』と『ドラゴン』、『魔法使い』しか使ったことはありません。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第5話 明かされた使命、告げられた名（前書き）

さてさて、今回は殴り書きステージ。

勝手にキャラが動き出したので、そのまま投入。

今回のキーカードは、『くず鉄のかかし』

ス「攻撃宣言時に発動して、相手の攻撃を無効化するカードだ」

カ「更に発動後は再びセットされるから1ターン中に1度だけなら無効にできる」

ス「『シールド・ウイング』2枚とこれ3枚あれば5体で攻められても無傷です」

カ「うわ…鬼畜」

ス「うっせ」

第5話 明かされた使命、告げられた名

『マジシャンズ・ヴァルキリア』

そう告げられた名前に俺は覚えがあった。まだデュエリスト駆け出しの頃、コレに泣かされた記憶があるからだ。まったく2体でも邪魔なのに3体出してくるドアホがいたからだ。俺にとってはすごくトラウマな一枚だ。確かレア過ぎて今じゃ一握りの人間しか持っていないはず……。

いやいや、思考を切り替えなければ。

今この子は『精霊世界』と言ったか？龍可さんから聞いてはいたけど、ホントに実在するとは……

「アナタと使命を共にせよ、との師からの命により、この世界でのサポートをさせて頂きます」

「何でまた、俺のトコに？」

「今から数ヶ月前、私達の世界に『ある者』が現れ、『精霊世界』そのものを荒らしていったからです。『エンシェント・フェアリー』様が何とか退けたものの、今度は『現実世界』にまで悪影響を及ぼしたのです」

「それには覚えがあるし、察しがつく……それが何で俺のトコに来るのか、に繋がるんだ」

「……『紅き竜』の導きでもあるのです」

『紅き竜』。

それについては聞いているし、実際に『見た』し、ここに『ある』。でもあれは『シグナー』：選ばれた者にしか痣が出来ないはずでは？

「確かにその通りです……ですが、アナタという『イレギュラー異端者』に『紅き竜』の痣が付いたのがその証……」

証……か。今の俺の背中には『紅き竜』そのものの痣がある。それも完全な『心臓』まで描かれた……俺に発現した理由も、何故俺なのか全く解らない。

「で……その『ある者』ってのは誰なんだ？まさか『ダーク・シグナー』とでも言うのか？」

「いいえ……『精霊世界』から退く際、『エンシェント・フェアリー』様に名乗ったのです……」

……『アポリア』……と」

『アポリア』。ギリシャ語で「問題解決能力の欠如」。そんな名前を持つのは一人しかない。というか知らない。

「やっぱ、アイツに辿り着くのか……」

「彼を知っているのですか!？」

実際には『聞いた』だけだが。義父^{とう}さんが倒し、仲間と信じていた奴に裏切られ…倒れた。そう聞いている。だが、俺はそれには疑問を抱いていた。確かに『あの頃』に現れたアポリアは倒れた。ならば、『別の時間』に存在する奴は倒されたのか?時間を遡って介入してきた奴…奴等がもし『他の時間』にまで介入していたとするならば…今アイツが現れたことには納得できる。

「成程……そこまで考えたとは、流石です」

「唯の推論だ……と言いたいが、そっちに現れたんなら推論じゃなくなる」

確かに出てきたのにはそれで納得できる。以前、義父^{とう}さんと話し

た事がある。さっきの通り、奴は『過去の時間』に入り込み、過去を変えたとするなら……俺が今ここにいる世界は『パラレルワールド平行世界』ではないのか？

俺の推論はこうだ。

アポリアはZ－ONEと共に過去へ遡り、改変することで破滅の未来を回避しようとしていた。だが、時間を行き来出来るのなら、『パラレルワールド平行世界』への移動も可能ではないか、と。ベクトルさえずらせば、奴等は別の世界に介入し、こちらと同じ時間軸の出来事を改竄する。そうすると、『平行世界』が『平行世界』ではなくなる。違う道を全く同じ車が、同時に、しかも同じ場所で事故を起こせば、それは既に『違う時間』ではなく、『全く同じ時間』、つまり世界が一つの道に繋がる。

「では、未来はアナタ方の世界と……」

「ああ……繋がるだろうな。間違いなく」

「それを未然に防ぐ為に、アナタが此方の世界に来て：『紅き竜』の痣を彼等から受け継いだ、と考えれば納得できるでしょう」

「だが、俺が『イレギュラー異端者』であることも納得してもらおうか」

「……？　どういう意味でしょうか？」

「俺は……『シグナー』の一人、『不動 遊星』の本当の子供じゃない。血が繋がっていないんだ」

数年前、完全にやさぐれてた俺を引き取ってくれたのが発端だ。それから一緒にD・ホイールを組み上げたり、デュエルの相手をし

てくれたりと、俺と一緒に居る時間を極力作ってくれた。親にしてはホントに満点だけど…それよりもあの朴念仁さを継がなくて良かったと、本気で思ったこともあった。

「では、アナタに痣が出来た理由は……」

「実のところ、サッパリ」

手の平を上に向けてお上げのポーズ。そうすると『ヴァルキリア』も、目に見えて落胆していた。その分ベッドが沈み込んだように思える。

「ま、俺にはやる理由があるし……俺がやりたいからやるんだ。別にそれ以上に深い理由は無い」

「……………」

「それに…正直困ってたんだよ…」

「……何が、ですか？」

困ったように頭を掻く俺に疑問符を浮かべる。此処に来て数日の間に起きた不安、不満を簡単に表すと、

「相談とか、今後の対策とか……色々言える奴が居なかったんだよ。だから来てくれて助かる。ていうか、助かったよ…アリガトな、『ヴァルキリア』」

「い、いえ……そんな…」

言いたい事が言えたところで、話題変更。

「そういえば、ここにいる間は何て呼んだら良い？」

「えっと…好きに呼んで頂いて構いません。本来の名はありますが…その、発音に困るというか…言語自体が違う、と言いますか…」

つまり、言えるは言えるが発音自体が不可能、と。じゃあ、考えるとするか…うーん、

「……………」

「……………」

期待してるような視線をこちらに向けてるけど、流石に考えられない。さっきまでの真剣な雰囲気からまるで子供のようにワクワクしてる感じに変わってる。基が基だからか？いや、アレについては審議中のはず……

「じゃあ、『ミーン』」

「『ミーン』……………」

考え付くのはそれしかなかった。俺の思考回路小っさ…なんてことはいいけど、頬を赤らめたまま、その名を復唱する『ミーン』。

「ギリシャ語で『女性』て意味だ。あまりに安直だろ？」

「い、いえ。とても素晴らしいお名前です……………ありがとうございます、ござ

います…」

首まで真っ赤になるんじゃないだろうか、っていうぐらい赤くなってる。これでも見た目は普通の女の子だもんな………何か一気にさっきまでの表情に戻ったけどどうしたんだ？

「…誰か来るみたいです。人数は二人…いえ、三人です」

ブルー寮で、三人組で、こっちに来るつつたら…今朝のか………
…ってえ!!!!!!

「兎に角隠れてくれ」

「何故です？」

いやアナタ、さっきまでの顔はドコ行った？ギャップありすぎて逆に怖いわ！

「『精霊世界』から来たんなら何か出来ないのか？何かこう、人寄せ付けないとか」

「それは出来ませんが…詠唱に時間が掛かります」

「どれぐらい？」

「完全詠唱で一時間ほど」

「長いわ!!」

肝心なトコでこんな漫才してる場合じゃない。コレで見つかったら

一体何時間小言に付き合わされることか……考えただけでゾツとする。

考え付くのは……鍵閉めて、電気消す。今はコレが精一杯。ドアの隅に移動して、ノックをやり過ごす。

『おかしいわね……さっきまで明かりが点いてたのに………』

『ほら、だからもう寝る時間だって言ったじゃない……』

『では、また日を改めて……ということ……』

『なんっか、スツキリしないのよね』

そこでやっと、足音共に喧騒が去っていく。聞こえなくなった所で、ようやく溜息。た、助かった……。

「何故明かりまで消したのですか？」

落ち着いたところにミィア。服装がワンピースのみだからか、月明かりに照らされ、それによって出来る影が彼女のボディラインの良さが窺える。……冷静に解説してる場合じゃない。

「悪いが、今日はここまで。何かどっと疲れた」

「そうですか……お疲れ様です……どちらへ？」

俺はベッドへは向かわず、部屋の中央辺りにあるソファの上に寝転ぶ。勿論ソファの毛布はソファの下に収納済み。それを羽織ると頭の後ろに手をやり、足の組む。

「俺はこっちで良い。ミーマはベッドで寝ろ」

「いいえ、そのような事せずとも「悪いがコレだけは譲れない。諦めろ」……解りました」

横目で見ると肩を落としてベッドへ向かう。そんなに落ち込むことか？でも、流石にいきなり同じベッドでって訳には行かないし……ま、いっか。今後の事は明日から考えよう。

今はもう……疲れた。

この時点で、俺が此処に来て四日目の夜が終わりを告げた。

第5話 明かされた使命、告げられた名（後書き）

精霊登場編でございました。

納得していない人も多々いらっしゃるかと思いますが………敢えて本音は伏せます。

感想、及びご指摘ありましたらお願いいたします。

第6話 次の運命、動く力（前書き）

第6話の投入。最近デュエルの勘を取り戻す為、TF6を攻略中。
ではキーカードを。

今回は、『棘の壁』ソーン・ウォール。

ス「自分フィールド上の植物族モンスターが攻撃された時に発動し、相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊する」

カ「植物族限定の『聖なるバリアーミラーフォース』だな。本家と一緒に運用すると、全体除去が二度も出来る」

ス「ただ…『ブラック・ローズ・ドラゴン』には全く意味を成さないけどな」

カ「あれ、ドラゴン族だし…」

第6話 次の運命、動く力

朝。

眠い目をこすって、体を起こすと、カーテンの隙間から朝日が差し込んでいる。

私一ミリアがここに来てからまだ数時間しか経っていないのに、こんなに静かに眠れるとは……。

結局あの人はベッドを譲ったままアチラに寝ているけど……ってあれ？

部屋の中央辺りのソファに誰も居ない。おかしいな……確かに寝ている間に何処か行った様子は無いけど。テーブルには彼の所持しているデッキにデュエルディスク……必要なものは置いてあるのに、当の本人はいない……。

ベッドを離れ、周囲を見渡すも居ない。やっぱりおかしい……丁度中央あたりに辿り着くと、何処からか寝息が聞こえる。

「……？どこから……」

やっぱり何処にもいない。もしかして……、

床に目をやると、そこにはうつ伏せで寝ている男『不動 カイト』がいた。

「ヒッ！………」

悲鳴を上げそうになるも、それを抑えて後ずさる。というより、何

「ほんつと迷惑な話だ……とは言っても、折角の協力者だ。仲良
くやっていくか…」

助かったのは本心だ。ここにいる以上、デュエルからは離れることは出来ないし、何かしらの予兆を探せば辿り着くだろうけど、何時、何処で、どんな事が起きるのかも全く予測が立たない。そこに『精霊世界』からの助力があったとあらば、それこそ本当に百人力って奴だ……。今日の夜辺りにでも対策を講じるか……。今後の生活に關しても、だけど。

教室に入った俺を待っていたのは、やはり昨日の三人…確か……：『ジュンコ』に『ももえ』だったか？何かやけに明日香にくっついて行動してるけど、お前等百合か？

「そつ、そんなワケないでしょ！？馬鹿じゃない？」

「そうですわ。全くもって心外ですわ」

二人して反論するも、明日香に視線を送っても「ヤレヤレ」といった表情。この娘等はこうなると止まらないってか……誰が『地獄の暴走召喚』を発動しろと言った？こっちは特殊召喚するのなんていないぞ。

「で……お前等、何の用だ？言っておくけど、今、俺は機嫌が悪い」

本当に、最悪なほどに、絶望したいほどに。

「何の用って……アンタ、昨日部屋に行っても出なかったでしょ？」

「ん………何時の話だ？」

勿論嘘だ。そんななんて慌てふためいて咄嗟の行動で凌いでいたのを憶えているけど……やっぱお前等か。

「ね？言ったでしょ……彼は早い時間に寝ちゃうから行っても意味ないって」

「確かにそうですけれども……子供でもそんなに早くは寝ませんわよ？」

「俺は早寝なんだよ。で……一体何だ？そういう話する為じゃねえんだろ？」

「当たり前。くだらない話するぐらいだったら……デュエルで話しつけようって思ってたね」

そうだった……ここはそういう場所だった。何から何までデュエルに繋げるんだった……今日、頭痛薬買って帰ろうかな？

「何時やるんだよ？まさか今からなんて馬鹿みたいな事言う気か？」

「んなワケないでしょ？放課後、ブルー寮前で勝負よ！逃げたら承知しないからね！」

「まったく……またあんな喰らうかよ……てか、そうなんべんも喰らってたまるか……！」

「これで決まりですわね…」

もうイライラを通り越して、何も言えない。こういうのばっかか？昔のアカデミアって……。プライドの凝り固まった奴等と三年間一緒かと思うと、やっぱり頭痛薬が欲しい。

昼休み・教室内。

「で？何故お前等がここにいる？」

「いいじゃんいいじゃん。気にすんなよ」

「そうッスよ。気にしない気にしない」

そっちが気にしなくてもこっちが気になるんだ。ってか、お前等の考え…もう解ってるし。

「『アレ』の事は教えねえぞ？こっちはこっちで忙しいの」

「そう言わずに、なあ？教えてくれよお」

しなを作るな！鬱陶しい。後ろにいる三沢に助けを求めるも、「デュエルすれば解るかもな」とありがたい言葉をよこしやがる。そうやって俺で遊んで楽しいか？貴様等。

「この野郎共、今すぐ潰して「おい、不動クーン」…ああ？」

呼ばれて教室の扉の方に視線を向けると……おい、精霊^{ミリア}。何で制服着てるんだ？しかも友達のように呼んでるけど、まだ会って十数時間しか経ってないぞ？妙にフレンドリーだな。

「不動君、あんな可愛い娘と知り合いなンスか？」

「まあ、知り合いというか……なんというか……」

「ん？あの人……何処かで見たような……」

マズい！！三沢の知識が働き始める前に早く行かなければ………思考を巡らせ始めようとした三沢の口にドロパン（ハバネロ入り）を突っ込む。一噛みした瞬間、奴の顔が赤くなった刹那、青く変色した。

「三沢、それやるよ。てわけで、俺はここで抜けるわ」

「ズルイっすよ」なんて聞こえるか、代われるわけ無いだろ。それともメガネ…代わりに『世界』救ってくれるか？

「ごめんなさい。教室まで来ちゃって……って、何処行くの？」

「……………」

ただただ無言で教室から出て行く。それについて来るミーマを視界の隅に捉えると、前にもこんな…ああ、入学初日にあったな、そんな。

人気のない廊下に辿り着くと、ミーマに聞いたです。

「おい、一体何の用だ？」

「一応今朝からの報告をしようと思って……」

「今朝からの？」

頷くミーマ。はて？ 部屋を出たのは俺だけだったが、コイツ何処に行ってたんだ？

「今朝から二時間かけて目ぼしい場所に『サーチャー』を仕掛けてきたんです。通常の間人には反応しませんが、『ソレ』以外の物全てに反応するよう仕掛けました」

「『^{サーチャー}探知機』？」

「と言っても、魔法概念での『サーチャー』です。目には見えませんが、発見の際には私の頭に報せられるようにしたんです」

そんなん出来たのか？ 流石魔法使い族。地味な作業でも光って見える。で？

「その制服はどうした？ まさかかっぱらってきたのか？」

「それこそまさかです。寝ている間にアナタの記憶を読取^{ローズ}して魔法によって作り出したんですよ。似合ってますか？」

その場で一回転すると、綺麗な金髪がソレにあわせて円を描く。その制服でその動き……反則って言葉、知ってる？

「似合ってはいる。でも、あんまり制服で出歩くなよ？」

「何故ですか？」

だから、その無表情に一瞬で切り替わるなって。ちょっと怖い。ホントに怖い。

「そういう作業に出るなら良いけど、あんまり出てくると……お前、人の目に見えないようには出来ないのか？」

「と、言いますと？」

「十代の横に『ハネクリボー』が居たんだが、皆気付かない様子だったんだ。それはお前は出来ないのか？」

さっきの会話中でも、騒ぎに入るように飛びまわっていた『ハネクリボー』だけど、俺と十代以外には全く見えていない様子だった。それって、何か基準みたいなのあるのか？

「『実体化』と『精霊化』ですか……可能ですが、我が師の命では『常に実体化し続けることで魔力の向上を図れ』と……」

逆に魔力使い過ぎじゃね？それ……てか師匠サン、この娘に何させ

る気ですか？

「逆にこの姿でも、私は構いません。こうして不動クンの…『主』の役に立てるのなら、この姿も苦ではありません」

ま、止めはしないさ。何つつたって…『パートナー』だから、な。

「それと…一つ、お願いがありまして…」

「ん？何だ？」

「あの…デュエルしてるところを「ここに居たわね！！」「不動カイト』！！」…っ！！」

ミィアの言葉を遮るようにして、俺の後ろに仁王立ちしているジュンコ。ど・い・つ・も・こ・い・つ・も…………。

「ジュ、ジュンコ、止めなさい。彼を怒らせたら…」

「すみませんが、それは聞けません…明日香さんに『力』で押さえつけたこの獣に鉄槌を下すまでは」

すく、はく。

うん、良いよね？

「ブツクサ言っ
てねえで、本音言
ってみろよ？『潰
したくて仕方
ねえ』ってよ…」

「「「え？」」」

明日香、ジュンコ、ミーマが一斉に視線を俺に向けてくる。そりゃ
そうだ、さっきよりも『声』が違うから。

「黙って聞いてりゃ、人を動物扱いしやがって……てめえの脳味噌も同じように動物だろうが。聞こえの良いこと言ってるけど、やってる事はそらの不良と変わらねえよ。気に喰わねえからってんだろ？ だったら放課後なんて言わずによ、ここで、今すぐやっても良いんだぜ？ てめえが勝ったらそっちにはこの先関わらねよ。逆にこっちが勝ったら、こっちの事には手出し、口出しすんな……解ったか？」

「ふ、不動…君？」

「あ、アンタ………」

「ね、ねえ…不動クン？ 背中………」

背中？ 背中がどうした？ なんか熱いんだけど……ミアが窓に映っている俺の背中を指差す。その背中には真っ赤に輝く『竜』が姿を現していた。

「げっ！！ ヤバ……ってコレ、どうやったら消えるんだ？」

「……さあ？」

意外に冷たいんですね、ミアさん。乾いた笑いと共に、『竜』の痣も消えていく。はあ、やっと消えた……しかし、なんで現れては消えるかな。

「人様の邪魔してるぐらいなら、自分の事どうにかしてから掛かって来い。それでも邪魔するんなら…全力で『叩き潰す』！！」

これで宣戦布告完了。ジュンコが歯を食いしばってコチラを見てるけど……ハッキリ言って、他のブルー生徒から見れば『無様』だろうな……絶対。

その放課後、予定通りに『カイト VS ジュンコ』の決闘^{デュエル}が始まろうとしていた。

第6話 次の運命、動く力（後書き）

第6話、投入完了です。

書いてる途中、「コレ、遊戯王か？」とか思っちゃいました。

やっぱデュエル描かなきゃ締まらないッスね。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第7話 カイトの実力、絆の力（前書き）

第7話、投入です。

今回のキーカードは、『スターダスト・ドラゴン』。

ス「自身をリリースして、破壊効果は無効にする誘発効果と、その効果適用時に自身を特殊召喚する蘇生効果を持つレベル8のシンクロモンスター」

カ「義父さんのエースカードにして、破壊耐性に非常に強い効果を持つてる…てか、やっとお出ましか」

ス「TF6での私のエースカードでもありますよ。最初に見たときから気に入ってます」

カ「レアリティは落ちてるけど、その分使い回しが良いもんだかな。素材に縛りが無いし」

第7話 カイトの實力、絆の力

放課後・ブルー寮前

「「決闘^{デュエル}!!!!」」

ジュンコ LP 4000

カイト LP 4000

約束のデュエルがいま始まった。ギャラリーは少なく、事情を知っている明日香、ももえ、ミリアに加え、十代、メガネ、三沢まで見に来ている。あんまり人の多いところでデュエルはしたくないんだが…：そういえば月一のテストって実技も含まれてるんだっけ？今から憂鬱だ……

「何百面相してんの？私の先攻なんだから、ちゃんとしなさい」

出来るかっつの。やる気満々なのはお前だけだ。あの後、何で怒ったのかをミリアに聞いただされた結果、反省しなさいとの事で、デュエルを見せる事に。まあ、『パートナー』の實力が解らなきゃ、何も出来んわな。

「私のターン、ドロー！」

カードをドローした後、塾考。どうやら最初から切り札、って訳じ

やないようだ。運が良いことにこっちの手札も良くない。何せ罠4枚にモンスター1枚じゃどうしようもない：義父さんからは「デッキの調整も怠るな」と言われ続けていたので、「このデッキ」に関しては、十分な戦略と調整を每晚欠かさなかった。それが早寝の理由。だって、大事な肉親のデッキだぞ？大事にしないほうがおかしい。

ハラが決まったのか：ジュンコがカードを3枚ほど手札から引き抜く。

「私は『エルフの剣士』を攻撃表示で召喚。更に手札から永続魔法、『連合軍』を発動。自分フィールド上の戦士族・魔法使い族1体につき200ポイント攻撃力がアップする」

エルフの剣士 ATK≪1400 DEF≪1200 ↓ATK
≪1600 DEF≪1200

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

成程…彼女のデッキは戦士・魔法使いの混合か、あるいはどちらか一本……か。下手をするとこっちのカードを奪われる可能性もあるけど……憶測じゃデュエルには勝てない。

「俺のターン！」

デッキから引いたカードは：『これ』なら機先を削ぐことができる。

「俺は手札より魔法カード、『手札抹殺』を発動！」

「なら…リバースカード、オープン！速攻魔法『サイクロン』を発動！！」

それ、意味無いよ？だって……

「魔法に対するチェーンで『サイクロン』は無駄撃ちだぜ？そのカードの効果はただ『破壊する』だけ。『無効』になるわけじゃない」

「しまった！……しくったなあ…」

「まだまだ甘い…」

手札を墓地に送り、同じ枚数分デッキからカードを引く。こっちは五枚、向こうは二枚。このアドバンテージはキツイぞ？

「ジュンコ、焦ってるわね」

「相手の手の内が解らないんですもの…無理はありませんわ」

「なあ、翔。何で『サイクロン』じゃ防げないんだ？」

「アニキ……『サイクロン』は「『サイクロン』の効果は相手の魔法・罠を一枚選択して破壊する速攻魔法。ただし速攻魔法である特性上、破壊効果のある罠のように無効化することまでは出来ない。例えば選択できても、発動までは止められない……今のもそう。チェーン上ではまず、『サイクロン』で破壊され、その前に発動していた『手札抹殺』が発動。でも『サイクロン』には無効化する効果までは付与されてない」………」

翔の隣に居たミーアが淡々と解説に入る。それにはミーア以外の人間はただただ驚いている。まるで以前から知っているかのような……そんな話し方だ。

「このアカデミアに居るなら、感覚も大事だけれど……思考と反射の両立も大事よ？遊城十代くん？」

「これならいける、か……俺は手札から、チューナーモンスター、『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK≡1300 DEF≡500

現れたのはオレンジ色の機械仕掛けの人形。腹部にはスターターのグリップが付いていて、ジャンク品のようなエンジンを背負っている

「なあに？そのちゃっちいモンスターは？アンタ、そういうのしか持ってないの？」

「アホが：『ジャンク・シンクロン』の効果発動。このカードが召喚に成功した時、墓地に存在するレベル2以下のモンスターを守備表示で特殊召喚できる。来い！『ボルト・ヘッジホッグ』！！」

墓地のゾーンから『ボルト・ヘッジホッグ』が守備表示になって現れる。背中に歪に刺さった螺子がフルフルと拳動にあわせて揺れる。

ボルト・ヘッジホッグ ATK＝800 DEF＝800

「何時そんなの墓地に……最初の『手札抹殺』ね!？」

「可愛いですわ〜」

「でも、レベル3に対して今のモンスターはレベルが2……それにチューナーモンスター、って…」

「それは『シンクロ召喚』に必要な不可欠なモンスターだよ」

「三沢君…どうということ?」

「以前教えてもらったんだが、あの『シンクロ召喚』にはチューナーと名の付くモンスターと、それ以外の素材となるモンスターのレベルを合計したモンスターを召喚する……と聞かされたよ。ここからは俺の考えだが…そのレベル配分こそ、あの『シンクロ召喚』の要なのかもしれない」

「でも三沢君……モンスターだって全てのカードってワケじゃないんだし…あまりその召喚は出来ないんじゃない…」

「だが奴は、「その気になれば五体全てがシンクロモンスターで埋められる」と言っていた。それが本当なら……俺の予想は、奴の実力の十分の一かもしれない」

「レベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』に、レベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング！」

『ボルト・ヘッジホッグ』が飛び上がると同時に、『ジャンク・シンクロン』がスターターを引っ張り、エンジンが唸りを上げる。その瞬間、『ジャンク・シンクロン』が三つの輪に変換された。

「『集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ』！！」

三つの輪が二つの星を繋いで一つになった時、紫色のロボットが白いマフラーを靡かせ、空高く舞い上がる。

「シンクロ召喚！！！！出でよ……『ジャンク・ウォリアー』！！」

ジャンク・ウォリアー ATKⅡ2300 DEFⅡ1300

「これが…『シンクロ召喚』。でも、墓地から拾い上げてもレベル5が限界なのね！？」

「だったらまずは先制だ。『ジャンク・ウォリアー』で、『エルフの剣士』を攻撃！！『スクラップ・フィスト』！！！！」

右手に詰め込まれたナックルダスターで、妖精界の剣士を打ち砕くと、大きな爆発が生じる。それは攻撃宣言を受けたジュンコにも衝

撃が走る。

「うあっ……クッ!!!」

ジュンコ LP ≡ 4000 ↓ LP ≡ 3300

「やったあ!!!」

「まずは先制だぜ!!! そのままやっちゃまえ!」

「カードを二枚伏せ、ターンエンド」

やっぱり義父さんみたいには上手くできないか……確か過去に攻撃力が5500まで上がったって聞いたけど……それを見たら何だか驚くどころの話じゃなくなるぞ。

「私のターン、ドロー!」

やたらと血気盛んだよね、あの娘。どうやったらそんな怖い顔でデュエル出来るのか……何か、このデッキ使っていると落ち着く。普段はあちらこちらに考え事が一杯あるのに、それが薄らいでいって『デュエル』に集中しやすくなってってる。何だろ?……こんなにも落ち着くなんて……

大きく深呼吸すると、俯いたままジュンコに話しかける。

「……おい」

「何よ!？」

「…………肩の力抜けよ。そんなんじゃ自分のエースカードは引けないぜ?」

「黙ってて!!」

じゃあ、何喰らっても文句は無いんだな? よしOK! 次のターンで滅茶苦茶に叩き潰してやる。

「私は『ビッグ・シールド・ガードナー』を守備表示で召喚。更に魔法カード、『戦士の生還』を発動。これにより、私の墓地から戦士族モンスター1体を手札に加え「さっきの手本を見せてやる。リバーズカード、オープン。速攻魔法『ダブル・サイクロン』発動」ちよ、ちよっと!？」

ビッグ・シールド・ガードナー ATK≡100 DEF≡2600

「相手と自分フィールド上の魔法・罠カード1枚ずつ選択して発動する。俺のもう一枚の伏せカードと、アンタの『連合軍』を破壊する」

赤と黄色の竜巻が、伏せカードと『連合軍』を巻き上げ、ぶつかるように破壊される。しかも、伏せたカードすらもこの布石。

「今破壊された伏せカード『リミッター・ブレイク』の効果発動。

このカードが墓地に送られた時、自分の手札・デッキ・墓地から『スピード・ウォリアー』1体を特殊召喚する。現れろ！『スピード・ウォリアー』！！」

砕け散ったカードが再構成され、その中からブレードを履いた戦士が滑り込むように召喚される。

スピード・ウォリアー ATK≡900 DEF≡400

「すげ……まさかあんな形で召喚するなんて…」

「言ったでしょ？思考と反射の両立、って。あんなの誰でも出来るわ。特にその三沢くんなら、ね？」

「流石に召喚までは行かないが……だがボード・アドバンテージでも、不動が有利。やっぱり凄いな。アイツは…」

「そうでもないわ。彼も最初はただボロボロに負けてばかりだったもの」

「」「」「嘘！！？」「」「」

「誰だって最初から強いわけじゃない……自分の力を知ってそれでも負けない戦い方を見つけた。それが、あの人の^{とっ}お義父さんと同じ、ローレベルモンスター同士のシンクロ召喚……」

伏せておいて正解だな。『ダブル・サイクロン』は『サイクロン』のようにエンドフェイズ時には使えないし、自分の場にカードが無ければ発動しない。義父さんが持つてる『スクランブル・エッグ』みたいなのも良かったけど、能動的に使うものじゃない。扱いが難しいのも困りものだ。

「私はこのままターンエンド（これならアイツのモンスターでも破壊されないし、次のターンまで持ち越せる。そうすれば『光帝クライス』で破壊できる）」

手札に良いのが来てるようだけど……顔に出てると読まれるって。てか、こういう駆け引きには向いてないよ。戦士族は装備も含めてビートダウン戦法が出来るんだ。単体じゃ……しかも『連合軍』が無いんだぞ？

「俺のターン」

そのカードは『ワン・フォー・ワン』。よし、引導を渡してやる。というより、俺なりの『絆』の力を見せてやる。

「手札から魔法カード、^{マジック}『ワン・フォー・ワン』を発動」

「な、何？ そのカード……」

「手札のモンスターカードを墓地に送る事で、デッキ・手札からレベル1のモンスター1体を特殊召喚できる。『チューニング・サポーター』を墓地に送り、デッキから『ロードランナー』を攻撃表示で特殊召喚！」

デッキから光と共に、桃色の小鳥が羽ばたきながら降りてくる。

ロードランナー ATK≡300 DEF≡300

「そして手札からもう一枚、魔法カード『シンクロキャンセル』を発動！」

発動の瞬間、『ジャンク・ウォリアー』が光に包まれ、融合デッキに戻っていく。

「今度は何!!!?」

「このカードは、自分フィールド上のシンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻し、そのシンクロ素材となったモンスター1組が墓地に揃っていた場合、その素材となったモンスターを墓地より特殊召喚する。コレにより、墓地の『ジャンク・シンクロン』と『ボルト・ヘッジホッグ』を特殊召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK≡1300 DEF≡500

ボルト・ヘッジホッグ ATK≡800 DEF≡800

残像のように残っていた『ジャンク・ウォリアー』が分裂して、『ジャンク・シンクロン』と『ボルト・ヘッジホッグ』の姿になり、フィールドに現れる。

「おいおい……」

「もしかして……」

「更に、手札より『ソニック・ウォリアー』を通常召喚！」

ソニック・ウォリアー ATK≡1000 DEF≡0

『スピード・ウォリアー』と違い、鋭角的なフォームの無骨な戦士が召喚される。てか、狙ってやってみただ、これって壮観だな。ローレベルとはいえ、フィールドに5体も埋まってるんだから。

「や、やりやがった…フィールドに5体も並べて……」

「で、でも『ビッグ・シールド・ガードナー』の守備力は2600……どのモンスターでも倒せませんわ…」

「手札より魔法カード、『地砕き』を発動。お前のフィールドの

守備力が一番低いモンスターを破壊する」

「ま、待った待った…」

地面が割れると、『ビッグ・シールド・ガードナー』が何も抵抗できずに落ちて行く。そして無情にも、割れた地面が轟音と共に閉じられた。あのカードは裏側守備表示であれば効果は無効化される。だが彼女は表側表示で召喚してしまったのだ。あのカードは裏側表示であればこそ効果が活きる。それを只守備力だけで判断するとは……。

「おいおい…これでジュンコの場合が空きだぞ？」

「それでもLPは3300も残ってる……例え場のモンスター全てを使つてのシンクロ召喚でも1体では届くかどうか……」

「お前等に見せてやる！これが俺達の『絆』の力だ！！レベル2の『ソニック・ウォリアー』に、レベル3『ジャンク・シンクロン』をチューニング！！」

今度は『ソニック・ウォリアー』を包む三つの輪。だが心なしか、ギャラリーの目が釘付けになってる。次はどんなモンスターなのか、と……ゴメン、期待を裏切ります。

「『集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ』！！」

そして今一度、紫の戦士が舞い上がり、拳を振るわせる。

「シンクロ召喚!!!! 出でよ: 『ジャンク・ウォリアー』!!!」

ジャンク・ウォリアー ATK≡2300 DEF≡1300

「はっ!! 何かと思えばまたそのモンスター? 身構えて損したわ。やっぱりローレベルはローレベルね、役にも立たない」

「それは違う: 例えどんなモンスターに破壊されても、どんなにレベルが低くても: 俺を支えてくれる、ずっと一緒に闘ってくれる仲間達だ!」

「「「「.....」」」」」

「それでこそ私の『主』です。不動カイト.....」

「墓地に存在する『ソニック・ウォリアー』の効果発動。このカードが墓地に送られた時、自分フィールド上にいるレベル2以下のモンスターの攻撃力は500ポイントアップする」

スピード・ウォリアー ATK≡900 DEF≡400 ↓A
TF≡1400 DEF≡400

ロードランナー ATK≡300 DEF≡300 ↓ ATK
≡800 DEF≡300

ボルト・ヘッジホッグ ATK≡800 DEF≡800 ↓ A
TK≡1300 DEF≡800

「そして、『ジャンク・ウォリアー』の効果発動!!」

「嘘!!? ソイツも効果モンスターだったの?」

「シンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するレベル2
以下のモンスターの攻撃力の合計分、攻撃力がアップする! 『パワ
ー・オブ・フェローズ』!!」

ジャンク・ウォリアー ATK≡2300 DEF≡1300
↓ ATK≡5800 DEF≡1300

「こ、攻撃力5800!!!?」

全てのモンスターから光を注がれ、攻撃力を上げた『ジャンク・ウ
ォリアー』。この効果の真髄こそがこのデッキの象徴、俺のデュエ
ルの『証』。最近、デュエルやってても一撃で終わってるような…
…ま、良いか。気のせい気のせい。さっきのこの娘の一言だけはち
よっと許せそうに無い。

「悪いが容赦なく行かせてもらうぜ!! 『ジャンク・ウォリアー』
ダイレクト・アタック
で……直接攻撃!!!!」

回転しながら上昇し、何mか上で拳を構えると、両肩のブースター
を使って急降下してくる。ジュンコ目掛けて。

「うあ……うわあああああああああああつ!!!!!!」

「『スクラップ・フィスト』オ!!!!!!」

ジュンコ LP≡3300 ↓ LP≡0

日も暮れ始め、デュエルを終えた俺達はフィールド内で談笑して
いた。あ後は正直居たくなかった。

ノーダメージ、しかも戦術どおり行かなかったジュンコがあらうこ
とか、泣き出してしまったのだ。最後はちよつとやりすぎたと思っ
たけど、それでも全力で応えるのが俺のポリシーなんで、ご容赦下
さい。てわけにもいかず、罰として全員分のジュースを買って来い、

と明日香に命じられ、『一人』で買いに行かされた。全員分は辛いんだぞ？そうして皆で談笑を始めると泣いていたジュンコも笑顔に戻り一段落。

「でも、スゴいな。今度、俺ともデュエルしてくれ」

「ま、気が向いたらな…」

「ホント、アニキはデュエルバカなンスから」

「でも、それが十代の良いところだろ？」

なんてな事を話して数分。それぞれの寮に戻り、明日香達とも別れて部屋に戻る。取り敢えずは勝ったものの…アレは何だったんだ？妙にクリアな感覚…そして、反射的に身体がついてくる。何だろ？

「『主』……」

「……って、俺の事か!？」

思考から戻ると、変な事を口走るミィア。何で『主』？俺、そんな偉いことしたか???

「何を以ってその呼び方なんだ？」

「いえ、『精霊世界』から来た以上、誰かを支え、見守っていく存在です。それは媒介が無ければ意味が無い。そしてその媒介を…貴方は既に持っている」

「持ってるって……まさか!？」

義父さんのデッキ・サイドデッキの中身を全部確認すると……いやがりましたよ、『マジシャンズ・ヴァルキリア』。しかも何故かサイドデッキに。

「それはもう貴方自身。肌身離さず持っている事で、私の『守護』によって護られます。これで名実共に我が『主』となりました」

いやいや……ミーマさん？

「はい？何でしょうか、主」

その言葉に俺はミーマを指差す。それには流石にビックリした様子で俺を見つめる。

「それ、出来れば止めてくれ。あと、俺はミーマに命令する為の主には……絶対ならない」

「何故、ですか？」

「主従関係じゃなく、お前は、ミーマは俺の……『パートナー』だ」

第7話 カイトの実力、絆の力（後書き）

キーカードと内容が合ってませんが…すみません。

やっぱデュエルは小説にすると、長い。

これも勉強しなければ。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第8話 独自申請、再会の歌姫（前書き）

えゝ……今回に関しては、申し訳ございません。

勝手に脳内で動き始めた結果、おかしい事が発生しております。

この話に関しては、不快に思った方は「戻る」、もしくは感想・ご指摘の欄に一言お願いします。

今回のキーカードは……無いです。

カ「無いのかよ!!?」

ス「たまにはいいじゃない。こういうのも」

カ「意外と楽しみにしてる人が居たらどうする!?!」

ス「そんな時はそんな時、って事で…」

カ「……………」（パシッ） ↑頭を叩いた音

ス「叩いたか、キミ」

第8話 独自申請、再会の歌姫

翌日。

起きてからというもの、ミアが何か余所余所しい……必要以上に話したがらない。はぐらかしてはサーチャーの様子がどうか言って部屋を出て行く。行くのは良いけど、頻繁に出て行き過ぎ。しかも数分おきに出て行く始末。

（俺……何かしたか？）

どう考えても……思い当たる節が無い。てか、そうなる理由を教えてください……。

昼休み。

何故か校長室。Why?……鮫島校長の横には何故かクロノス先生……この人の顔を見てると殴りたくなるのはどうしてだろ？

「折角の休み時間に申し訳ない…実は君に話があつてね。隣に居るクロノス先生に勝ち、非公式ながらも負けなし、と聞いてどんな生徒か見ておきたくてね」

よくもまあ、そんな建前がツラツラ出てくるものだ。『サテライト』のガキでもそんな馬鹿にされてると取るぞ。んな考えはさておき、呼ばれた理由は一つ。

「校長、そんな建前は良いでしょ？」

「おや、バレてましたか。では単刀直入に聞きます。あの『シンクロ召喚』とやらは一体何ですか？」

どうやらクロノス先生がチクツたようだ。しかもこの教師、ブルーの生徒を贔屓しているらしい。あくまで噂だけど、な……さて、どうしたものか？話してもいいが、その『軽口』クロノスをどうにかしないと……

「話すにあたって二つほど条件が…」

「何でしょう？」

「まずはクロノス先生には退室していただきたい」

「な、何故なノ～ネ!？」

居て当然みたいな言い方するなし。しかもそれだけのことで思いきり憤慨してるな……もっともらしい理由としては、

「このお話をするにあたっては、校長と俺だけの話にさせていた

だきたいんです。無用に情報を流したくない内容なんですよ」

「……そうですか。では、クロノス先生……」

「わ、解りましたノ～ネ……」

やっぱり上には逆らえないらしい。間接的に追い出したんだ……これで話せるな。

「それで、もう一つの条件は……？」

「それはお話が終わった後にして……まず、『ありのまま』の事を話します」

授業が迫っている事も忘れ、俺は校長に話を切り出した。

『シンクロ召喚』が未来のデュエルで使われている事。

それが下でそこから先の未来が崩壊しかけたこと。

そして、自分の『使命』を……

話し終わったのは一時間ほど。

「これが、俺自身の『ココ』にいる理由です」

そう言うと、校長は深く、深く溜息を漏らした。そりゃそうだ、誰もこんな話信用しないだろ…でも、現実には『シンクロ召喚』が噂として横行してるんだ。信じざるを得ないだろう。肩で大きく溜息をした校長が口を開く。

「成程…凡そは理解しました。ですが、もしこの時代でなければどうするのですか？」

「その時は他の時代に飛びます。干渉し過ぎない程度には消えますよ」

『消える』。それはこの時代から自身を抹消する事。かといってそ

んな便利な事はできないが、神隠し程度にはとられるか。

「……………」

「幸い、ここには『三幻魔』があるようです……まずはそこから調べます」

「!?!? 知っているのですか？」

「さあ……流石に場所までは。ただ、伝承レベルのものは調べさせてもらいますよ」

ここにだって図書室ぐらいはあるだろう。そこで一般生徒が閲覧できないような書物があるならそれを調べる。そしてその事を校長に報告すれば良いだけ。リスクはほとんどないし、逆にこちらが得る情報は多分に増える。情報戦だけでも『相手』に二歩先をいかなければいけないだろうし。

「良いでしょう。古書室での閲覧は許可します。ただし、持ち出しは厳禁なので…」

「それは解ってます。それと、ここでもう一つの条件を提示します」

「何かな？」

「俺のサポートをする為に来た奴が一人、そいつにアカデミア島での行動を認めていただきたい」

これがもう一つの条件。情報と調査…この二つを両立させるには一

人では無理だ。ともすれば必然と一人増える……………。

「その方は今、どちらに？」

「大方、下調べしたところを再度回っている頃でしょう。夕方には合流する手筈なので…」

これは嘘。朝からずっと話しかけづらかったのだ、何処行ったなんて知るか。

「では、その方の行動を許可しましょう…何分学校としても敷地としては広いので私も把握できていない箇所があります。何かありましたらその都度報告してください」

解りました、と会釈すると校長室を出る。流石にクロノス先生は居ないか…いや、居たら逆に怖いな。授業以外は何してんだろ、あの先生。

「ああ、すみませんが…」

奥から校長が呼ぶ。けど、こっちの用件も校長の用件も終わったはず……何だか嫌な予感しかない。

「何か？」

「いえ、良ければ良いんですが……ある人の校内案内をお願いしたいのですが…」

「それって、先生方の仕事では？」

「本来はそうなのですが…それには少し事情が違うのです。このデュエルアカデミアはプロデュエリストを育成する公的機関ですが…それを『子供のゲーム』だとか、『大の大人が必死にする事ではない』という風潮が少なくありません…」

「つまりイメージアップの為…ですか？」

『あの人』もよくそんな世俗的な事を許可したモンだな…

「そうです。そしてそのイメージキャラクターとして、『ある』有名人をこの学園に呼びましたんです。本来はポスター用の写真撮影なのですが…この学園のイメージを一新するにはどうしても…」

「ふ…ん…で、その案内役に俺、ですか？」

「流石に生徒には申し訳ありませんが、この件に関しては公欠扱いにしますので」

欠席扱いでも…良いか。ほとんど基礎的なことしか教わってないし、それについては別段困らない。が、他の授業に関してはおいそれと休めそうに無いかも…特に『錬金術学』。アレ、何で通常授業として組み込んだ!？

「良いでしょう…お受けします。が、それは『相手』によります」

そりゃあ、強面のオッサンだったら願ひ下げ。てか、そんな人に校内案内したら通報されませんか？

「それには心配に及びませんよ? 先方は是非『貴方』で・とおつ

しゃってたので」

？そりやどういうこと？校長…何か余計な事言いました？おもむろに校長が取り出したのはとある『雑誌』。その雑誌を受け取ると机に腰掛ける。失礼？そんな事言ってられません……てか、『アイツ』、雑誌の表紙すらも飾るか…大変だねえ。それよりもそういう方々とはあんまり面識ありませんけども？

「で？……どなたですか？その物好き…」

その質問を雑誌を指差す事で答える。正確にはその雑誌の『表紙』だ。ま・さ・か……校長、一つお聞きします。

「……………^{シヤ}本気ですか？」

そして二日後。アカデミア島・港。

当然の如く来てしまいましたよ、ワタクシ。良いのかな？お出迎
えの当日、初っ端の授業が『錬金術学』……来て早々だけど、単位
落としたかも……考え終わるよりも先に、クルーザーが到着する。
どこにでもある普通のクルーザーなのだが、俺には見覚えがある。
てか、デカデカと貼るんじゃないやねえよ、自分の名前。

さてさて、『コイツ』なら肩肘張らずに挨拶できるし、マネージャ
ーも顔知ってるし……ん？何か騒がしいけど？

「だから言ってるでしょ？こんな時間掛かるならへりで来た方が
良かったじゃない！！？」

「あら？そういう割には船酔いしてないわよね？」

「昔から船には強いの！解ってるでしょ！！」

ああ、今度こそさらば。俺の平穏……ミアと一緒になくて良かった。
居たら居たで一から説明しなきゃいけないし……。

クルーザーから出てきたのは紺色のスーツを着た女性。髪もスーッ
と同じ色だ。いやあ、久方ぶりッス。と言いたいが、その後に続い
て……出たな、テンベスト台風。白いパーカーにピンクのワンピース。下はカ
ットジーンズ。帽子まで態々……日焼け対策か？そして顔が隠れるん
じゃないかって言うほどの大きなサングラス。てか、二人共こっち
に気付けよ。

大きく深呼吸すると、彼女等の声に負けじと挨拶する。

「HEY！！！！」

その声に二人はやっとコチラに気付く。一瞬「誰？」って顔した人、
後で海岸^{おもて}出る。

「Welcome to the Duel Academia
……Ms.『Sheryl Nome』」

仰々しく礼をした後に呼んだ名前……彼女こそオリコンランキング首位を独占し続ける『宇宙の歌姫』……

「あら？ 久しぶりじゃない……カイト」

彼女の名は、『シェリル・ノーム』。

第8話 独自申請、再会の歌姫（後書き）

これについては面目次第も御座いません。

ファンの方が居たらそれこそ平謝りです。

感想・ご指摘ありましたらお願いします。

第9話 意図的な再会、怒りの決闘（前書き）

えー、暴走第二段でございます。

一応は区切りの良いところで収めますのでご容赦下さい。

さてさて、今回のキーカードは、『デルタクロウーアンチ・リバー
スー』

ス「『BF』^{ブラック・フェザー}専用の『ハーピィの羽根箒』といった所ですね。自分フィールド上に『BF』^{ブラック・フェザー}と名の付いたモンスターが存在するときに発動でき、相手フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する全体除去効果」

カ「しかも3体以上存在する時に発動する場合は、手札からも発動できる珍しい罠だな」

第9話 意図的な再会、怒りの決闘

「まさか、本当にデュエルアカデミアに居るとはね」

「言っただろ？ここが『目的地』なんだよ……今まで行った所は全部『通過点』」

アカデミアへ向かう道中、世間話に花を咲かせる俺とシェリル。俺と会ったのは一年前。ライブ会場にバイクで乱入した俺をマネージャー、グレイスさんの雇ったボディガードと勘違いしたシェリルと意気投合(?)して入学試験までの数ヶ月間、世界を転々と移動した。ある時はジュネーブ、ある時はロサンゼルス。その間も俺は彼女のボディガードとして片時も離れなかったし、離してくれなかった。否、ワガママに振り回され続けた。

「にしても驚いたよ。シェリルがココに来るって聞いた時は」

「何をするにも刺激が必要でしょ？それにこの話は二週間前に決まってた事だし」

「てことは俺には内緒だったってか？意地悪過ぎるぜ？グレイスさん」

俺達の斜め後ろにいるグレイスさんに悪態をつく。この人は年齢にそぐわぬほどの悪戯好きなもんだから逆に手に負えない…

「人生には刺激が必要でしょ？」

それで済ませた。うん、確かに刺激は欲しいデスヨ？でも、俺にと

っては心臓が縮んだわ。

「まずは校長と話して、それから滞在用の部屋に案内する。荷物抱えたままで悪いが我慢してくれ」

「嫌。先に部屋に行きたい」

始まったよ……ここで機嫌損ねたら帰りがねないな。要望には応えるか。

「判ったよ。じゃあ、まずは部屋に案内する。そっからは学校内の案内だ」

部屋に案内するとその足で校長室へ。授業中で助かった……これで休み時間だったらどうなってた事やら。

校長室に入るなり、その口調を変えることなく、日程説明。期間としては五日間。今日と明日は下見なので撮影自体は三日目からスタートし、順調に行けば四日目の夕方には終わるらしい。しかも、次の写真集にも使うものも含まれている。グレイスさんの計画力には感謝だな。俺への自由時間まで作ってくれるんだから。

一通りの説明が終わると、そのまま学校内の案内をする。購買だったり、デュエルフィールドだったり。月一試験で使うフィールドも

今は点検中。

「そういえば明後日は月一の試験だから、その時は俺は付き添えない」

一応学生としての本分は忘れていないのでそこは免除して欲しくなかった。校長も時期が時期なのでそのつもりは無かったらしく、試験当日まではシェリルのボディガードとして動いてくれ、との事。

「解ってるわ。そこまで私も鬼じゃないし…赤点取ったら承知しないんだから」

時間になると、午後には実技試験だから……順番が良ければ彼女の休憩時間には見に来れるはず。『はず』！

「だけど、流石に見に来る訳には行かないわよ？どれだけの生徒でこった返すか……」

やっぱりマネージャーとしてはそこか。超が付くほどの有名人だ。ましてや俺がそれに付き添っていると解れば……次の朝陽は拝めそうに無い……。

「ま、それはそっちの時間が合えば、って事だろ？良いじゃねえか。そっちは仕事で、こっちは学業」

「ねえ？デュエル見せてよ。また『あのドラゴン』見てみたい」

シェリルさんご自慢のスキル『ワガママ』が発動しましたよ…ま、性格知ってる都合上、止める気はありませんけど。

「何言ってるの？シエリル。相手が居なきゃ意味無いでしょ？」

本来止めるはずのマネージャーがそれを言いますか……じゃなきゃ『^{テンベスト}台風』の付き添いは勤まらないか。でも、見せるにしても相手が居なきゃなあ……かといってこっちから挑んでも『ハズレ』引きたくないし。

そこに、本当は来るはずの無い男『万丈目』が現れた。何人もの取り巻きを連れて……来たな、ハズレくじ。

「何をしている！？道を開けろ……っと、貴様は不動」

「いかにも……それと普通は挨拶するところだろ？そんなツラで挨拶されても嬉しくねえんだけどな」

「五月蠅い！！この間は貴様のお陰で大変な目に逢ったんだぞ！！？」

「お？その様子じゃガードマンにこっ酷く怒られたのか？」

あの取り巻きとのデュエルの後、俺が時間を気にしたのはそれが理由だった。十時半を過ぎると、ブルー寮前を見回りに来るのは計算していたのだ。それを見越してとっと切り上げて部屋に戻ったけど……ホントに来たのか。

「逃げたさ！！足の速さに関しては誰にも負けないんでな」

「それは褒められたものじゃないんだけどね」

あゝあ、グレイスさんまで呆れ始めてるよ。シエリルに関しては時間ばっか気にしている。もう昼だっけか？だったらコイツラは来な

いし。

「良いご身分だな。女を二人も連れて、しかも授業にも出ずに校内をブラブラと……」

「校長からの許可は取ってあるし、第一頼んできたのは校長自身なんだが……」

「何!?!?」

「てか、こっちを見ても何も気付かないワケ?」

親指でシェリルを指差すと、腕を組んで不快な表情をしている。そろそろ昼にするからもうちょっと待ってろ。てか、コイツラと話す俺の身にもなってくれ。

「ま、まさか……あの『宇宙の歌姫』……」

「それよりカイト? お腹空いたんだけど……さっさと案内して」

「急かすなシェリル。てか、この害虫共を追っ払う手伝いぐらいしろよ」

「や。何で私がそんな奴等を追っ払わなきゃいけないの? それはボディガードのアナタの役目でしょ?」

はいそうですね。解りましたよ……それより、こりゃ都合だな。

「明らかに不満そうだな……だったらデュエルでもするか? そうだな……放課後、改めてココで相手してやるよ」

「な、何だと!!?」

「お前等の誰かが勝ったら、コイツのお守りを変わってやるよ」「ちよっ!! 誰のお守りよ!!?」「こっちが勝ったら…解ってるな?」

「手出し口出しは一切するな、だな?」

「お、いっちよ前に学習したか……じゃあ、次は散歩だ。Come on, puppy. Let's go」

犬においでおいでをする仕草に憤慨し始めたのは勿論万丈目達だ。シェリル? 後ろで腹抱えて笑ってますが何か?

「良いだろう…今度は俺直々に相手をしてやる……完膚なきまでに」「叩き潰してやる……!!」

んでもって放課後。

ギャラリーはシェリルにグレイスさん。プラスして、どっから聞いたのか十代、明日香、メガネ、三沢、ジュンコ、ももえ。いつものメンバーじゃねえか。

ま、いつか。ちなみにシェリルは彼等の後ろで立ったまま観戦している。気付かれちゃお終いだからな……今から後の事考えると心臓がバクバクなんですけどね。

切り替え切り替え。コイツ相手なら『師匠』のデッキで行くか。あの大口叩きから考えると『パワーデッキ』で来るかな？それを見越してのこのデッキだ。

「準備は良いか？」

「フン、早くしろ」

急かすな害虫。この間みにたいに速攻は無理かもしれないけど、善戦してみせろ。

This party is getting crazy…… Let's rock. (イカれたパーティーの始まりだ……行くぜ)

「^{デュエル}決闘!」

万丈目 LP 4000

カイト LP 4000

「先攻は俺だな。なあに、お前にも俺の力を見せてやる、ドロ―
！俺は『グランド・ドラゴン』を攻撃表示で召喚。更に手札から装
備魔法、『ビッグバン・シュート』を発動し、『グランド・ドラゴ
ン』に装備」

グランド・ドラゴン ATK≡2000 DEF≡100 ↓
ATK≡2400 DEF≡100

こりゃ苦戦するかもな…なんて言うと思ったか。

「更にカードを二枚伏せ、ターンエンド」

「一気に攻撃力を上げてきた…今回も短期決戦か」

三沢も唸る。ドラゴン族の主な戦法はモンスター効果とその攻撃力にある。『グランド・ドラゴン』のような召喚ルール効果を持つているモンスターは上級モンスターだけだが、その召喚ルール効果を柔軟に活かした戦術が必要。しかし、万丈目はただパワーだけで判断してこの効果を利用し、アドバンテージを稼いできた。

「だけど、不動君のデッキが読めない以上、彼もどういう戦法で来るか……」

「俺のターン」

来たのは『二重召喚』。これで出来るのは……

「俺は『パワー・サプライヤー』を召喚。更に魔法^{マジック}カード、『二重召喚』を発動。これによりこのターン、俺はもう一度通常召喚を行う事ができる」

パワー・サプライヤー ATK≡400 DEF≡400

つまりは俺の意思で召喚権を使わなくても良い。けど、『コイツ』が来ている以上、出すしかない。

「そして、『パワー・サプライヤー』をリリースし、『ストロング・ウインド・ドラゴン』を攻撃表示で召喚！」

金色の粒子に変換された『パワー・サプライヤー』から再構成されたのは、翡翠色の体表の、風を纏いし竜。フィールドに降り立つと、『グランド・ドラゴン』すらも見下ろす。

ストロング・ウインド・ドラゴン ATK≡2400 DEF≡1000

「よっしゃあ！これで『グランド・ドラゴン』と並んだぜ！」

「だが、このターンに攻撃しても次の万丈目のターンのダイレクト・アタックの直接攻撃で大幅に削られる」

「バトル!!! 『ストロング・ウインド・ドラゴン』で、『グラ
ンド・ドラゴン』を攻撃! 『ストロング・ハリケーン』!!!」

風を吐き出すと同時に翼を羽ばたかせ、竜巻を『グラント・ドラゴ
ン』に叩き込もうとするも、負けじと『グラント・ドラゴン』もそ
の両腕を『ストロング・ウインド・ドラゴン』にねじ込んだと同時
に爆発。

「くっ!!!!!! だが、お前のモンスターも…な、何!!!!?」

万丈目が目にしたのは、煙から晴れても健在の『ストロング・ウイ
ンド・ドラゴン』。確かに相打ちになったはず…なのにカードを発
動した兆候は確認できない。なら、理由は一つ。

「『ストロング・ウインド・ドラゴン』の効果…このカードは同
じ攻撃力を持つモンスターとの戦闘では破壊されない」

「ば、馬鹿な!」

「そんなに驚くなよ……ちょっと考えれば攻略できるだろ? 『天
才』サマ」

確かに2400以下のモンスターには勝てる。だがここでネックなのが『同じ攻撃力』なのだ。『元々』が付かない時点でこのカードの制圧力は落ちるが序盤ではこんなにもこの効果が活きる。それだけがこのカードの効果じゃないけどな…

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「すっげ…あの効果」

「確かにな……下級モンスターに『突進』の効果で攻撃力を上げても、『シフトチェンジ』で攻撃対象を変えられれば一方的に破壊できる…使い方としてはそんなところだろうな」

「あの柔軟な思考力…あれが不動君の『武器』…」

「前の子達、やっぱり驚いてるわね」

「アイツがそんなにひよかったら私は雇ってはないわ」

「俺のターン、ドロー！」

さあ、どう出る？こっちは上級モンスターが一体、しかも生半可な

攻撃力じゃ殴り負けるぞ？言ったはずだ、ちょっと考えれば解る、って。

「俺は『仮面竜』を守備表示で召喚し、ターンエンド」

仮面竜 ATK＝1400 DEF＝1100

あ、そ。よつくわかった……お前もただの『愚図』なんだな。んなこと言ったら義父さんに怒られるけど……ゴメン、すっごく落胆します。

「じゃ、俺のターン」

あゝあ、一気にやる気無くなったな。一応向こうはリクルートしてくるだろうけど、手は打っておくか。

「手札から『フォース・リゾネーター』を攻撃表示で召喚。レベル6の『ストロング・ウインド・ドラゴン』とレベル2の『フォース・リゾネーター』をチューニング！」

『フォース・リゾネーター』の手から放たれた電撃が二つの輪を作り、『ストロング・ウインド・ドラゴン』を包む。

「『王者の決断、今赤く滾る炎を宿す、真紅の刃となる！熱き波濤を超え、現れよ』！！」

その光の筋から現れたのは、二振りの長剣を携えた赤い剣士。その名も……

「シンクロ召喚!! 焔の鬼神! 『クリムゾン・ブレイダー』! !」

クリムゾン・ブレイダー ATK||2800 DEF||2600

「そしてリバースカード、オープン。^{トラップ}罠カード、『リビングデッドの呼び声』! このカードの効果により、俺の墓地に存在する『フォース・リゾネーター』を特殊召喚する」

今一度現れた『フォース・リゾネーター』ですらもちよっと肩を落としている。何か、「こんな奴を倒すためにまた出て来たのか」的な感じ……そう落ち込むなよ、お前の『効果』使うから。

「『フォース・リゾネーター』の効果を発動。このカードを墓地に送り、自分フィールド上の表側表示のモンスター1体を選択し発動する。選択したモンスターが攻撃するとき、このターンのダメージステップ終了時まで相手は、モンスターを対象にする魔法・罠^{マジック}・効果モンスターの効果を発動する事ができない! 俺が選択するのは勿論、『クリムゾン・ブレイダー』」

墓地のゾーンにカードを送ると、そこから電撃が発せられ、万丈目の場の伏せカードが雷を帯びる。これで発動を封じたけど……これって裏を返せば『メリット』だよな?

「『メリット』ッスか?」

「ああ。あのカードの効果は自分フィールド上のモンスター1体を選択と言ってた。発動制限自体が『選択したモンスターを対象』ではなく、『全てのモンスターを対象』に発動できないんだ。簡単に言えば、フィールド上全てのモンスターを対象にした効果すらも発動できない。この場合だと、『亜空間物質転送装置』が使えないな…あと『強制脱出装置』か。ただし『魔法の筒』は対象を取らないから発動は出来る」

「何でだ？」

「またアニキは…あ」「魔法の筒」は攻撃宣言時、モンスターの『攻撃力』を相手のLPにダメージとして返す効果。攻撃宣言したモンスターにも、攻撃対象になったモンスターにも対象を取っていない」…また言われたツス」

「キミか…奴のデュエルあるところにキミがいるが、一体何者だ
い？」

「私は………」

彼の、何だろうか？

「バトル！！『クリムゾン・ブリーダー』で、『仮面竜』を攻撃
！！『レッドマードー』！！」

紅い炎を纏った回転斬りで『仮面竜』を両断。だが、決定的なダメ

ージは与えられず、しかも相手に特殊召喚を許してしまう。

「『仮面竜』の効果発動。戦闘により破壊されたとき、デッキから『仮面竜』1体を特殊召喚する」

仮面竜 ATK≪1400 DEF≪1100

「ちっ、ダメージステップ後だから意味が無いか…カードを二枚伏せ、ターンエンド」

伏せてもこっちには効果が生きてる。それで奴の行動自体を制限できる。こっちの優位に変わらない。

「俺のターン、ドロー！」

次は何かな？コイツもちょっと考えればすぐ解る問題だぜ？さつきヒントは言ったしな。

「手札から『デビル・ドラゴン』を守備表示で召喚。更に手札から魔法、『二重召喚』を発動！！」

デビル・ドラゴン ATK≪1500 DEF≪1200

お前…ちゃんと勉強しろよ。てか、パワービートもそろそろ飽きてきたな。自分の伏せカードも確認しないで……

「これで揃った！！『デビル・ドラゴン』と『仮面竜』生け贄に……何だ！！？エラーだと！！！！？」

「『クリムゾン・ブリーダー』の効果だ。このカードが戦闘によってモンスターを破壊した次のターン、相手はレベル5以上のモンスターを召喚・特殊召喚が出来ない」

「そんな……!!」

それには流石にミィア、シェリル、グレイス以外の全員が驚く。

「そんな効果が……」

「それじゃあ、万丈目君は実質1ターンは何も出来ないの？」

「魔法や罠は使えるが、壁モンスターしか出せず反撃も出来ない。しかも召喚制限とくれば、万丈目の伏せカードは恐らく攻撃力強化か、相手の行動制限。『威嚇する咆哮』ではないだろうが……それでもこのターンで体勢を整えないと次で終わる」

おやおや、長考か……横槍入ると面倒だから黙ってるけど、それでも長い。夜が明けるぞ？

「よし、カードを一枚伏せて「リバースカード、オープン。速攻魔法、『サイクロン』発動。今伏せたカードを破壊する」……くそっ！」

破壊したのは『奈落の落とし穴』。一応は破壊したけど……この局

面だと正直微妙。じゃあ、伏せは何かな？それがワクワクするんだけど。

「ターンエンドだ！！」

だから、怖い顔するなよ……スマイルスマイル、てか？

「俺のターン」

ま、やりですか。このデッキにも入れておいて正解、だな。

「手札から魔法カード、^{マジック}『シンクロキャンセル』発動」

「げっ！！」

発動した瞬間、ジュンコがビクビクし始めた。ああ、あれはトラウマだもんな。やったのは俺だけだ。

「自分フィールド上のシンクロモンスター1体を選択し、そのモンスターをエクストラデッキに戻す。そしてそのシンクロモンスターのシンクロ素材となったモンスターが1組、墓地に揃っている場合、素材となったモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。戻って来い！『ストロング・ウインド・ドラゴン』、『フォース・リゾネーター』！」

『クリムゾン・ブレーダー』の残像が光に変わり、二体のモンスターに実像が変わる。

「そしてもう一度、レベル6の『ストロング・ウインド・ドラゴン』と、レベル2の『フォース・リゾネーター』をチューニング！」

同じように雷の輪が『ストロング・ウインド・ドラゴン』を包み、
一筋の光に変わる。

「『王者の鼓動、今此処に列を成す！天地鳴動の力を見るがいい』
！！！！シンクロ召喚！！！！」

現れるは赤銅の焰の竜。そして俺の背中には……『紅き竜』の痣が
背負われる。

「我が魂……レッド・デーモンズ・ドラゴン！！！！」

今、第二ラウンドが、始まる。

第9話 意図的な再会、怒りの決闘（後書き）

お話中に気になる部分・訂正箇所が御座いましたら気兼ねなくどうぞ。

感想・ご指摘も承っておりますので、お願いします。

第10話 疼く痣、そして終劇へ（前書き）

第三弾でございます。

まさかの！？という感想を頂きました。

感想をくれた方、お返事できず申し訳ございません。

今回のキーカードは……『共鳴破』。

ス「『リゾネーター』と名の付いたモンスターがシンクロ召喚に使用される度に相手フィールド上のカードを一枚破壊できる永続魔法」

カ「発動後2ターン目のスタンバイフェイズ時に破壊される自壊効果もあるが、1ターン内の制限が存在しないのがメリットだな」

第10話 疼く痣、そして終劇へ

「やっと出したわね…」

「でも私が見たいのは『アレ』じゃないわ」

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を注視するグレイスとシェリルだが、今にも憤慨しそうなシェリル。初めて見るドラゴンではあるが、

「私が見たいのは……あの『白い』ドラゴンよ。あんな無骨なカードじゃない」

「あら？力一辺倒のじゃなくて？」

意外にもあのカードではなく、他が目当てらしい。いずれにしても、カイトの『あのデッキ』では召喚出来ないのを知るのは、この後のようだ。

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK≡3000 DEF≡2000

「出たな……それがお前のエースカード、か」

「…違う」

「何だと!!?」

そりゃそうだ。誰も『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がエースなんて言っていないし、知りもしない。

「このカードは、俺の師匠のエースカードだ。俺のじゃない……誰がそんなこと言った?」

にしても、痣が前より熱い……何でだ? 『紅き竜』はシグナー足り得る人間にその痣を託す、と聞いているけど……まさかねえ。ま、デュエルに集中しますか。

「バトル!! 『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『デビル・ドラゴン』を攻撃! 『アブソリュート・パワー・フォース』!!!」

「何!!? 『仮面竜』ではなく、『デビル・ドラゴン』だと!!? (そうか! そういうことか!!!!)」

そこで笑うか？普通……でもいっか。

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の効果発動！！」「な、何だと！？」このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、ダメージ計算後に相手フィールド上の守備表示モンスターを全て破壊する！！」

簡単に言うと、表示形式限定の大掃除、ってトコだな。ダメージ計算後だから計算時に発動する効果が発動するの意味が無いが……伏せカードはそんなトコロか？……って、おい。

何も発動しないんかい！！！！！！

「くそっ！！！！！！一体何が……モ、モンスターが……」

あゝあ、もうやる気無いぞ！？てか、ドローしても何も無いなら勝手に終わらせる。

「お、おいおい……何てモンスター効果だよ！？」

「でも、何で『デビル・ドラゴン』を攻撃したんでしょうか？」

「恐らく、『仮面竜』のモンスター効果を警戒したんだろう……『仮面竜』は相手からの攻撃によって破壊された時、同名モンスター

を特殊召喚する効果。攻撃宣言したのが『仮面竜』だった場合、ダメージ計算後の効果により、新たな『仮面竜』が特殊召喚され、万丈目のフィールドには壁モンスターが残る」

「だから敢えて『デビル・ドラゴン』を攻撃して、効果破壊したのね」

（だが、それだけがあのカードの効果とは思えない……まだ何かあるはず……）

「ターンエンド！」

もう俺の中はグチャグチャ……これじゃあ義父さんとの『約束』を曲げたかな……エンド宣言しちゃったからもう降参出来ないし……けどココまで来たから最後までやるか。

「俺のターン、ドロー！」

引いたのは……、

「俺は永続罠^{トラップ}、『リビングデッドの呼び声』を発動！このカードの効果により、墓地から『仮面竜』を特殊召喚する「リバーズカード、オープン。速攻魔法『ダブル・サイクロン』を発動し、自分と相手フィールド上のカードを一枚ずつ破壊する。お前の『リビングデッドの呼び声』を破壊し、俺も『リビングデッドの呼び声』を破壊する」……まさか速攻魔法を二枚とも伏せるとは……！」

「罫トラップを一枚も伏せずに1ターンやり過ごしたンスか!？」

「本来は一枚は罫ブラフとして伏せるのがセオリーだが、まさか……」

「……………」

「どうしたの? シェリル……………シェリル!!?」

「俺はこれでターンエンド!!」

「俺の「カイトオ!!!!」…シェリル!？」

おいおい、グラサン外すなって。バレるっつの!!

「アンタ、そんな気持ちでデュエルしてるの!!? アンタがしたかった事はそんなチンケな終わり方で『満足』するの!？」

……………

「そんな事なら最初からやらなきゃ良かったでしょ!? それがアンタのやり方? その気持ちを捨てて、『全力で』向かっていきなさい!!! それなら勝っても負けても後腐れ無いでしょ!!!!!!?」

「シェリルって……」

「あの『シェリル・ノーム』!？」

そうだ……そうだった。俺は……、

「ありがとう、シェリル……」

「は!？」

「目え醒めた……後、お前に預けた『アレ』、持ってるか？」

「『アレ』……?」「持ってるわよ」ってグレイス!？」

グレイスさんが放ってきたのは、コート。それさえあれば……俺は『俺』でいられる。そのコートは俺の師匠、『ジャック・アトラス』のコート。ブルーの制服を脱いでそのコートに袖を通す。サイ

ズとしては充分合うけど、やっぱり派手だな。

「そ、そのコートは一体!？」

「気にするな。何も変わらねえよ……ただ、俺の『モチベーション』が戻っただけだ」

「それだけか? だがそれだけでデュエルに勝とうとでも言うのか?」

「悪いが、3ターン以内でケリを着ける」

てか、今までのを帳消しにするにはもうやるしかないでしょ。見てくれよ……^{ジャック}師匠。

「改めて……俺のターン!!」

引いたのは……手札補充には充分だ。てか、これに助けられるとは……

「魔法カード^{マジック}、『紅蓮魔竜の壺』を発動!! 自分フィールド上に『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が存在する時に発動でき、デッキから二枚ドロウする。ただし、このカードを発動したターン、自分は召喚・特殊召喚は出来ない!」

二枚ドロウ……一枚で何とか出来るか。

「俺なりのエンターテイメントを見せてやる。^{マジック}魔法カード、『光の護封剣』を発動!! これにより、3回目のお前のエンドフェイズまで、モンスターは攻撃出来ない!」

「エンターテイメント、だと!？」

おお、おお…怒っちゃって。1ターンは余裕だろ？

「俺はこのままターンエンド」

「くっ! 舐めやがって…俺のターン、ドロー!!」

お解りかもしれないが、奴は怒ってます。それこそコケにされっぱなしで何もしないほうがおかしい。けど、俺の手札には『コール・リゾネーター』に『クリエイト・リゾネーター』。これで一発です、ハイ。

「俺は手札から魔法カード^{マジック}、『強欲な壺』を発動!これによりデツキからカードを二枚ドロー!!更に手札から『ミンゲイドラゴン』を召喚。そして手札から魔法カード^{マジック}、『二重召喚』を発動し、もう一度通常召喚を行える」

ミンゲイドラゴン ATK≡400 DEF≡200

二枚目か…考えたな。というより、あの『ミンゲイドラゴン』って今引いてたよな？

「『ミンゲイドラゴン』を生け贄にする時、このカードで二体分の生け贄にすることが出来る。俺は『ミンゲイドラゴン』を生け贄に、『フェルグラントドラゴン』を召喚!!」

粒子に変換された『ミンゲイドラゴン』から姿を変え、金色の龍がその姿を現す。いや、生で見ると綺麗だな……

フェルグラントドラゴン ATK 2800 DEF 2800

「どうだ!!? このデッキの最強モンスター、『フェルグラントドラゴン』の神々しい姿は! お前のその不細工なモンスターよりも輝かしい姿を、その目に焼き付けるが良い!」

え、そのキミ。ドヤ顔でシェリル見るな。良い事言ったような顔してるけど、当の本人は見向きもしてませんよ?

「それよりも綺麗なの見てるから勘弁。てか、そこにいる歌姫様のほうが千倍は綺麗だぜ?」

「あら? 解ってるじゃない?」

「ば、馬鹿にして……カードを一枚伏せ、ターンエンドだ!!」

「馬鹿にはしてないが……事実だろ? 俺のターン!!」

やっぱやり辛い……なんて、言ってもらえないか。でも、流石中等部トップ……その腕は飾りじゃないか。うーん、言った手前どうするかな

？このまま特殊召喚しても良いけど、あの伏せカード……補助効果なのか？というより、あのカードの効果じゃ一発で終わりは出来な
いか。それでも…

「面白くなりそうだ……バトル！！『レッド・デーモンズ・ドラ
ゴン』で『フェルグラントドラゴン』を攻撃！！『アブソリュート・
パワー・フォース』！！！！」

「それなら、リバースカード、オープン！罠^{トラップ}カード、『和睦の使
者』を発動。このターン、自分のモンスターは破壊されず、戦闘ダ
メージは0となる！」

ちっ、厄介なカードを…だが、それもこのターンだけ。次こそは、

「このままターンエンド！！」

「俺のターン、ドロー！」

マズい……勢いでターンエンドしたけど、奴が『サイクロン』と『
フェルグラントドラゴン』の効果を使えば『レッド・デーモンズ・
ドラゴン』は破壊される。かといって、何も伏せないままなのはこ
のターンだけにしないと・な。

「来ないか……俺はコレでターンエンド」

これで次のターン、『光の護封剣』は消えて奴は攻撃可能になる。
どうする？温存していたこの二枚を使うか……使うよな、普通。

「自分フィールド上にシンクロモンスターが存在する時、手札の
『クリエイト・リゾネーター』を特殊召喚することが出来る。来い

「！」

これまたシニカルな悪魔だな。背中に花を一輪背負ってるとか無いよ…

クリエイト・リゾネーター ATK＝800 DEF＝600

「更に、『アタック・ゲイナー』を通常召喚！！」

アタック・ゲイナー ATK＝0 DEF＝0

「荒ぶる……荒ぶるぞ……俺の『魂』があ……！！！！」

赤いオーラと共に、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が舞い上がり、全てのフィールドに火の粉が飛び散る。

「レベル8の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』に、レベル3の『クリエイト・リゾネーター』とレベル1の『アタック・ゲイナー』を…ダブルチューニング！！」

素材指定の後、二体のチューナーモンスターがそれぞれのレベルの数の輪に変わる。そして炎の輪となり、『レッド・デーモンズ・ド

ラゴン』を包み込む。

「『王者と悪魔、今此処に交わる！荒ぶる魂よ、天地創造の叫びを上げよ』！！！！シンクロ召喚！！！」

そして……荒ぶる悪魔の竜が、『痛んだ赤色の焰竜』の名の下、フィールドに降り立つ。

「現れろ……我が半身……！！」
『スカーレット・ノヴァ・ドラゴ
ン』……！！」

第10話 疼く痣、そして終劇へ（後書き）

最近、TF6にて『キメラテック・オーバー・ドラゴン』で遊星相手に15100叩き出しました。

やりすぎたなあ…と感じる今日この頃です。

感想・ご指摘ありましたらお願いします。

第11話 新たな光、次なる試練（前書き）

前話にて、手札枚数における事故が発生していたので訂正致しました。

ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

今回のキーカードは…『デモンズ・チェーン』

ス「相手フィールド上のモンスター1体を選択して発動し、選択したモンスターは効果を発動できず、攻撃宣言できない」

カ「ただし、選択したモンスターが破壊された時に破壊される…
…扱いは簡単だけど、あまりマイナーじゃないカードなんだよな。
使ってる人なんて見たことないし…」

第11話 新たな光、次なる試練

えっと、すでにテンプレ化……ゲフンゲフン、もといセオリー化しかけてる『スカーレッド・ノヴァ』を召喚。しかも手札は一枚だけ。間違ってもここでは使わない。使えば後々自分の首を絞めるだけ……てか、こんな使い辛いデッキだったっけ？

「それは以前見た……」

「ああ、これが『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の一つ目の進化の形、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』」

「一つ……他にもあるというのか!？」

ま、それはおいおい教えていくか……でも『スカーレッド・ノヴァ』が何か落ち着かない感じだな……闘って良いのかどうかソワソワというか、一歩先に出れないっていうか……

「迷ってたら負ける!!……墓地にいる『アタック・ゲイナー』の効果!このカードがシンクロ素材となったとき、相手フィールド上のモンスター1体の攻撃力を1000ポイントダウンさせる!」

「な……ということは……」

「ああ、『フェルグラントドラゴン』の攻撃力を1000ポイントダウン!!よって『フェルグラントドラゴン』の攻撃力は2800から1800になる」

フェルグラントラゴン ATK||2800 DEF||2800
↓ ATK||1800 DEF||1800

「くっ!!」

「更に『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』は、墓地にいるチューナーモンスター1体につき、500ポイント攻撃力がアップする。俺の墓地いるチューナーは3体!よって『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』の攻撃力は…」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK||3500 DEF||
3000 ↓ ATK||5000 DEF||3000

最早これもセオリーっていうか、当然の攻撃力。単純に『レッド・デーモンズ』から即座にシンクロ召喚すれば当然3体はチューナーが墓地に送られる。最低数値で驚かれてもこっちが困るんだけど…
…てか、5体も墓地に落とした師匠は恐ろしい……

「てことで、バトル!『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』で『フェルグラントラゴン』を攻撃!『バーニング・ソウル』!!!!」

「好きにさせるか!!!リバーカード、オープン!カウンター罠、
『攻撃の無力化』!相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる!」

ブラックホールの様な壁が現れ、『スカーレット・ノヴァ』の攻撃の軌道が逸れる。たしか『攻撃の無力化』って攻撃が吸い込まれるんじゃないか？こっちは体当たりだから吸い込まれたらたまったモンじゃないけどな。

「カードを一枚伏せ、ターンエンド！」

これでまたハンドレス。今伏せないと怖いことになるから……『フェルグラントドラゴン』の効果だけは要注意だからな。

「俺のターン、ドロー!!！」

今更だけどしつもん。キミ、ドローする度にシエルル見てるけど……何で???この姫様はちょっとやそつとじゃ動きませんよ?しかもその当の本人は『スカーレット・ノヴァ』をジッと見てるし……そんな気に入らないのかな?泣くぞ、こん畜生。

それにやっと『光の護封剣』も消えて、条件としてはイーブン。だけどアドバンテージはこっちが有利。

「俺は『フェルグラントドラゴン』の効果を発動!自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を選択し、選択したモンスターのレベル1つにつき200ポイントアップする。俺は墓地の『グラントドラゴン』を選択。『グラントドラゴン』のレベルは4。よって『フェルグラントドラゴン』の攻撃力は800ポイントアップする!!！」

フェルグラントドラゴン ATK≡1800 DEF≡2800
↓ ATK≡2600 DEF≡2800

だが『スカーレット・ノヴァ』の攻撃力には遠く及ばない。それを承知で……まさか、

「行くぞ!!!」『フェルグラントドラゴン』で、『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』を攻撃!!!「それは通さない!リバーズカード、オープン!永続罠^{トラップ}、『デビルズ・チェーン』!」何!?!?」

「フィールドで表側表示の効果モンスター1体を選択し、そのモンスターの効果は無効化され、攻撃も出来ない!選択するのは:『フェルグラントドラゴン』!!!」

カードから伸びる鎖が『フェルグラントドラゴン』を締め上げ、地上に叩き落とす。のた打ち回る『フェルグラントドラゴン』に鎖が軋みを上げる。てか、こんな形で攻撃も封じるのか:

「ちっ! (手札の『死者蘇生』で何とか出来ればと思ったが:まさか効果だけではなく攻撃まで封じるカードがあるとは……だからこそ、俺は:) ターンエンド、だ」

エンド宣言の時の声が一段と小さく聞こえたのは気のせいかな?

「俺のターン!」

引いたのは……って、ちよつ、何でこんなカード持ってるんだ、師匠!?!? てか今の状況にはピッタリか:一撃で決める!!!

「手札より装備魔法、『魔力の足枷』を発動し、『フェルグラントドラゴン』に装備する」

現れたのは、顔の付いた巨大なモーニングスター……ではなく、足枷。てか、足枷の鉄球にトゲ付いてて良いのか？その足枷が『フェルグラントドラゴン』の右足首の辺りに填められ、ほんと弱っていく。

「な……どういことだ！？」

「このカードを装備したモンスターの元々の攻撃力は100になる。そして、装備モンスターのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ時に500ポイントのライフを払う」

「100…たった100だと！！？」

フェルグラントドラゴン ATK≡1800 DEF≡2800
↓ ATK≡100 DEF≡2800

「しかもご丁寧にも『フェルグラントドラゴン』は攻撃表示…ライフの心配はしなくて良いぞ？一撃で終わるからな」

「く……くそっ！！」

「悪いが、俺の『魂』はお前に容赦はするな、と言っている！バトル！！『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』で『フェルグラントドラゴン』を攻撃！『バーニング・ソウル』！！！！」

炎を纏った紅蓮の竜が万丈目に止めの一撃を加え、LPがゼロと同

時にその長くも激しい攻防戦に幕が下りた。

「全く……長いよ!! あんなの、ちゃっちゃと手早く終わらせれば良かったじゃない! そんな長ったらしいデュエルばかりだったの?」

万丈目が退場してから数分後。只今、シェリルよりのお説教中。目当てが見れなかったのがそんな不機嫌の理由なのか、当り散らす場所が俺しか居なかったようで……てかお前の目当てって、まさかとは思うけど、

「機嫌は戻ったか?」

「戻るワケ無いでしょ!!?」

「そりゃご尤もで……お前が見たかったのって……こっちか？」

義父さんのデッキからあるカードを取り出し、それをシェリルに見せる。

「そう!! それよ! 何で出さなかったのよ!？」

だって……違うデッキだし、相性合わないし、シナジー薄いし……理由を挙げればキリが無い。でも……

「これ……義父さんのデッキのエースなんだ。今使ったのは師匠のデッキだからな、入れるわけにはいかなかったんだよ」

憂いを含んだ表情でそれを言うと、シェリルの顔が曇る。親からの大事な物を大切にしないなんて、親不孝も良いところだ。それはシェリルも充分承知してるはず。

「そう……そうだったんだ……」

「それに、月一の試験でコイツを使うかもしれない……生半可な使い方じゃあ勝てないだろうしな」

「解ったわ。なら、それで勝ちなさい! そうじゃなきゃアナタが私のボディガードとして勤まらないわ」

そことボディガードと何の関係があるんだ? 一応は喧嘩じゃ負け無しだけど……そこだけ義父さんと一緒なのはどうかと思ったことはある。

「じゃあ、ミーア。行くぞ?」

「はい…後、私からもお説教させていただきますので」

「お前等揃って、俺を何だと思ってやがる!!?」

「彼女がどう思ってるかは解りかねますが…私は、その…『パートナー』ですから……」

ミーアの顔が幾分赤い。パートナーでそんなに赤くなるかな?でも、何か勘違いしてるようだ。

「ちよっ、ちよっと!!その『パートナー』ってどういうこと!?聞いてないんだけど!」

ここにもいたよ、勘違い……てか、やっぱ一言足りない。

「ああ、それは…ちよっとした仕事だよ。頼れるデスクワーク役が居なくてな…そういうのが得意だってんで」

これは一応本音なんだけどな。チマチマした仕事はどうも苦手だし……あ、D・ホイールの整備とかは得意だし、ディスクの調整も自分なりに何とか・か。

「それよりミーア、お説教って何についてだ?」

「勿論、今のデュエルについてですが…何か?」

ああ、聞いた俺が馬鹿だった。それしか無いわな…

「だったらカイト?明日はよろしくね。場所については明日の朝

に連絡するわ」

そう言っグレイスさんと連れ立って、デュエル場を後にするシェリル。てか、そろそろ授業に出させてくれ。グレイスさんのスケジュールだけじゃ追っ付かない気がしてきた。何せ最近、デュエルしかしてないような？

「いいなあ、不動君……あの超有名人と仲良しなんて…」

「しかもお互い名前で呼び合ってるし」

「これはもしかして……」

最後の、黙ってろ。代わるか？絶対一時間で根を上げるぞ。

「只の雇い主だよ。歳も近いし、気にするな」

「にしては何でも知ってるような口ぶりだったわよ？」

そりゃそうだ。一年近く寝食を共にしてるんだ。知らないほうがかしい。てか、今着てるコートは試験の数日前にグレイスさんを通してシェリルに渡しておいたコートだ。『何時か帰ってきて、お前の仕事を手伝ってやる』って約束と共に。一応はまだ契約も生きるそうなので卒業後の進路としては申し分無い。

「ねえ？そのコートだけど……」

「ああ、俺の師匠の現役時代のコートだよ。ディスクと一緒に渡されたんだ」

ちなみにD・ホイールの方は丁重にお断りした。はっきり言うけど、あんな趣味の悪いのには乗りたくない。やっぱ派手みたいだな。

「まだまだ格^{ガキ}下さ。受け継ぐには程遠い」

「でも、デュエルはすごく強いじゃん！今度、俺ともデュエルしてくれ」

「前にも言ったが、気が向いたらな」

「それか今やろうぜ？」

「人の話聞いてんのか！！？このドアホ！！」

皆の笑い声が木霊する中、どうしてか心が安らぐ俺がいる。何故だろう？義父さんにも言われたな……俺なりの絆を見つけ出せて。これが……『絆』になるのかな……？

その後、ミーアの予告通りにお説教を喰らいました。しかも明け方まで……皆して俺を殺す気か？

第11話 新たな光、次なる試練（後書き）

これにて、VS万丈目編は終了です。

3話ぶっ通しは疲れた。

万丈目のデッキはドラゴン族主体にしました。どんなデッキだったかはちよつと忘れましたが…

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第12話 白銀の翼、届かない目標（前書き）

いよいよ試験突入です。

誰を相手にするか悩んだ結果をどうぞ。の前に、

今回のキーカードは、『バスター・モード』。

ス「シンクロモンスターをリリースして、そのモンスターに『バスター』と名の付いたモンスターを特殊召喚する」

カ「罠^{トラップ}カードだからバトルフェイズ中でも使える不意打ちの一撃には丁度良いな」

第12話 白銀の翼、届かない目標

月一試験前日。

部屋で勉強中、隣から聞こえる大声に頭を悩ませる。何故かシェリル達の滞在用の部屋が俺の部屋の隣なんだ？あの校長、狙ってやってるだろ……集中出来やしない。

そこにミーマが珈琲を持ってやってきた。何でも、食堂へ行って持ってきてくれたようだ。よくバレなかったな？

「どうですか？調子のほうは…」

「見て解らないか？隣をどうにかしなきゃ無理だ。と言いたいが、簡単過ぎて笑いそうだよ」

『向こう』の方がルール上は変化しているものの、基本的なフェイズ内の行動までは変わらないし、強いてあげるならエクストラデッキが融合デッキになってるぐらいでさして問題ではない。

「たしかに騒がしいようですが…その様子だと問題点は無いですね」

「そうだな……そっちはどうだ？」

「こっちもさして異常はありません。ですが、これぐらいでは安心できません……何時『アポリア』が来るのかまでは予測出来ませんし」

「言い忘れたが、奴は別の姿になってるかもしれない…」

ミーアもそれには目を丸くした。実際に会ってはいないにしても、そこまで用意周到にしてくるだろうか？という疑問はあったようだ。

ホセ

ルチアーノ

ブラシド

彼女にはこの三人の名前は伝えたので警戒はしてくれる。が……

「そうすると、もう一度サーチャーを作り直さなければ……」

「結構時間かかるか？」

「場所としては多くありませんが……それでも全て作り直すのに一日ほど」

だったら心配無いか。奴とてとんでもないスピードでこっちに来るわけじゃない……だとすると、

「『パラドックス』の時のように、過去から変えていくつもりか……時間があつたら過去の出来事も調べてみる」

ミーアが頷くと、そのままベッドに向かっていき、脇にある椅子に腰掛ける。何をするわけでもなく外を眺めているが気にしてる余裕は無い。俺は教科書を閉じると、そのまま義父さんのデッキをいじ

り始める。

「…？勉強は良いのですか？」

「実技もあるんだ…そっちに集中する。今回は義父さんのデッキリでいくよ」

使うって伝えてしまった以上は、万全にしなきゃ。ただでさえ周り
難しいデッキリだし……。

そして試験当日。

ちょっと飛ばすけど、筆記試験は問題無し。途中、十代達が遅れて
試験を受けてたけど遅れた理由は聞かない。どうせ寝坊して余計な

事したんだろ？それに、善悪関係無しに遅れても自分の人生なんだ、後悔しないで欲しい：

その昼休み、多くの生徒が絶望した顔で購買から出てくる。何だ？何でも新発売のパックが全て売切れになっていた、という。それも大人買い……何か犯人が解ったんですけど？人気の無くなった購買で昼食をかうと、ほぼ入れ違いでシェリルが入ってきた。

「お？撮影はどうした？連絡来なかったけど……」

「休憩がてらの撮影場所の検討。アンタは？」

「見ての通り、メシだけど……お前もドローパーン目当てか？」

「あんなギャンブル紛いのゲテモノなんて食べたくないわ……それよりこっち」

そう言って手に取ったのは普通のサンドイッチ。しかも野菜中心の。

「お前も大概菜食主義者だな……」
ベジタリアン

「何よ、いけないの？」

いやいや、良い事だけど……昨日も野菜中心じゃなかったか？偶には肉とか食えよ。とか思ってる間にさっさと会計済ませて購買を後にする。うーん、やっぱ台風だな。さつと来てさつと帰る……つと、

「おい」

「ん？」

「後でメールする。順番が判ったらな」

「りょーかい」

軽く敬礼して足早に立ち去る。多分気付かれるのを見越して急いで戻るんだろうな…でも、きっと誰かには捕まるぞ、絶対。

試験会場では、数人がデュエルを終えて各々が一喜一憂している。負けた者、勝った者、筆記試験と総合しても意味無いだろう。恐らくは筆記は飾り。本命は実技か………実力主義のあの社長らしい。というよりも、実技が八割、筆記が二割ってトコだろう。所変わって、試験会場のデュエル場。そのフィールド傍の廊下で待機してる俺にミィアが歩み寄る。

「やっと見つけました。お届け物です」

って、お前は宅急便のお姉さんか？そんなつまないツツコミよりもその手にあるのは……デュエルディスクに、洋服が一着、綺麗に折畳まれている

「それ…一体誰から？」

「決まってるでしょう。アナタのお義父さんからです」

なぬ？

「それは一体どういう…？」

「明け方頃に『エンシエントフェアリー』様が龍亜さんからの言伝を…それで一度精霊世界を通じて未来世界あちらに戻り、預かってきたんです」

アナタ、淡々と言ってるけど…端から聞いたらドンデモ作業の連発してるって気付いてる？つまりはコレを着て臨めって事か……

「それと、アナタのお義父さんから伝言を頼まりました…」

『試験に勝てば俺からは卒業だ。お前はお前の絆を自分の力で作れ』、と」

全く……無駄にハードル上げてくれちゃって……

「……」

ブルーの制服を脱いで、『ソレ』に袖を通す。うん、ピッタリ。そしてグローブの部分は外して、デュエルディスクを装着。態々自分のD・ホイールから外して渡してくれるんだから無駄に親馬鹿だな。

この際良いか……これで負けたらミリアに渡して返せば良いし、逆に勝ったら俺のものだもんな。ただし調整は欠かさないけど。

「似合ってますよ」

「『馬子にも衣装』って言いたいんだろ？」

「お世辞は嫌いなので……」

じゃあ、ホントに似合ってるって事？でも裏を返すと師匠のコートは似合わないってか……師匠、コートも謹んで返却しますんで。てか、無表情でお世辞じゃないって言われてもこっちはどう言えっつの？

「じゃあ、行きますか」

「私は観客席に……それと」

「まだ何かあんのか？」

「勝ったら、……褒めてあげます」

俺は子供かつつの。

実技試験・デュエル場

いやゝ、緊張する。てか、誰が相手だ？これでこの間の取り巻きとかだったら怒るぞ？容赦しないし。

相対したのは、ツインテールの女子。薄い紫色の髪をしてちよつとツリ目のキツそうな性格そう。

「アンタが相手か？」

「そ。藤原雪乃よ、よろしく」

そう言って握手を求めてくる。意外と礼儀正しくてビックリした。

「不動カイトだ。こちらこそよろしく」

握手を交わすと、丁度クロノス先生がやってくる。うん、唐突に殴りたくなってきた……多分生理的に嫌いなんだと思うことにして…

：掻い摘んで説明すると、学園での非公式戦負け無しという戦績上、他の生徒では釣り合わないとの事での組み合わせらしい。

「これに勝っても負けても両者にペナルティはありませんノ。お解りでしょうか？」

お互いに頷くと定位置へ。距離を開けて向かい合うと、互いに自分のデッキをシャッフル。といってもこっちはオート。それには藤原も他の生徒も驚きの声を上げる。

しまった。いつものクセでそのままシャッフルしちゃったよ。もう遅いか……

「随分と便利ね」

「義父さんのお手製だからな。ちなみにカード選択も自動」
他にも録音機能等々、既にディスクを通り越して万能器具だ。

「んな事より……さっさと始めよう。後が聞えてるんだ」

「そうね…それじゃあ、

「決闘^{デュエル}!!!!」

カイト LP 4000

雪乃 LP 4000

「先攻は私ね…ドロー」

熱くなる性格ではない・か。冷静に分析して手持ちで対処できるようにデッキ構築されてるんだろうな…そして、やっぱり何か気持ちが悪くなる。とつても判り易く言うと、視野狭窄ではなく、逆に全てが広く見える。視野全体に意識を集中できるようだ。その気になれば相手のクセを初見で見破れそうだ。

「私は『マンジュ・ゴッド』を攻撃表示で召喚して、効果を発動」

マンジュ・ゴッド ATK 1400 DEF 1000

「このカードが召喚・反転召喚に成功した時、自分のデッキから儀式モンスター、もしくは儀式魔法を手札に加える事が出来る。私は『高等儀式魔術』を手札に加えるわ」

とすると、あのデッキは儀式召喚特化型か…あのサーチ手段からすると、一度召喚しないと回転しづらいのか。

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

何もしない。なら手札にモンスターが来てないのか。先にモンスター、次に儀式魔法がセオリーでも何か考えがあるんだろ？

「じゃあ、その前に……………」

大きく深呼吸。慌てない慌てない……これは命賭けてるわけじゃないし、焦りは無しにして。

2回目。

3回目。

「俺のターン!!」

勢いよく、それでいてカードを痛めずに引き抜く。手札は申し分無いが、無理はしない。焦れば相手の思うツボだ。ならこっちも、

「手札より魔法カード、『手札抹殺』を発動！これにより、お互いの手札を墓地に送り、その枚数分だけカードをドロウする」

「嘘!?!いきなり『手札抹殺』!?!?でも、こっちは止める気は無いわ」

じゃあ、遠慮なく。今の手札も悪くは無いが、ほとんどが墓地で機

能するカードだ。墓地に送って……五枚ドロ。っと、確認が終わったところで、

「墓地の『ダンディ・ライオン』の効果を発動！」

墓地から枯れかけている向日葵が顔を出し、フィールドにタネを飛ばす。タネが埋まったと思うと、そこから綿毛が二つ現れる。

「このカードが墓地に送られた時、自分フィールドに『綿毛トークン』2体を守備表示で特殊召喚する。ただしこのトークンを特殊召喚したターン中、『綿毛トークン』をリリースできない」

「あの中にいたのね……というか、『リリース』って何？」

「俺なりの『生け贄』の呼び方だよ。子供が言うには語弊があるだろう？」

「それもそうね……お次は？」

落ち着こうね。深呼吸をオススメするよ……手札に目を通すと、そこにはコミカルなガス缶と、青い巨体の大男。でも今は使えない……なら、

「俺は『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK≡1300 DEF≡500

「それは……意外と趣味が悪いのね」

「何も無いなら黙って見てろ……自分フィールド上に、『ジャンク』と名の付いたモンスターが存在する時、『ジャンク・サーバント』を特殊召喚できる！」

ジャンク・サーバント ATF≡1500 DEF≡1000

今度は継ぎ接ぎだらけの機械の人形。オレンジのへっぽこ機械に継ぎ接ぎ人形。馬鹿にしたいなら好きにどうぞ？ただし、笑った分だけの代償は払ってもらうけどな。

「一気に四体……どんな展開力なの？」

トークンを含めても四体が限界か……『ボルト・ヘッジホッグ』の効果は使わないほうが良いな……このデッキや一度が限界だし。

「レベル4の『ジャンク・サーバント』に、レベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング」

「チューニング？じゃあ、ソレが噂の……」

スターターを引っ張った『ジャンク・シンクロン』が三つの輪になり、『ジャンク・サーバント』を星に変えながら包み込む。

「『集いし怒りが、忘我の戦士に鬼神を宿す。光さす道となれ』
！！」

そして現れたのは、骸骨の様な仮面に、巨大な剣を携えた赤き鬼神。

「シンクロ召喚！吠えろ、『ジャンク・バーサーカー』！！」

たえどそんなに冷静でも……エンジン全開で………振り切るぜ
！！

第12話 白銀の翼、届かない目標（後書き）

試験第一弾、如何だったでしょうか？

短くて申し訳ございませんが、ご容赦下さい。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3005y/>

遊戯王 trust of world

2011年11月21日16時17分発行